



河津
金澤

連歌
集

八百
五十七

中村俊定文庫
文庫 18
24



後よなるしる書にさしを其のあまらし
のこころにわがまをさし出たわらふは
今は一冊豊前守佐の素門何集を
この書法よりん及図解を原款古詩等
付合し一便あると書集のけい
懐の環ししもの本よりん
まある書に編解するものと
しる書に編解するものと

物よなん究に志ふく執るる
徳の折ぬ一感の場をかく
るる藻波山をなげけ
あゆみしに空賢

旨
延享元年信如中旬

法眼
昌通

取回すあまの五と響なるく世の心もあは
れとたのしみとのおこしむる世の
いふつ薬は濃なるあみくんと世の
やれはをたのしむるあはれとく
るるはるるのあはれ愛の心は
うらやま古歌は讀合とるる果物を拾ひ

付合の事とてさきく〜りん〜はるま
〜しよ〜の書とめ並傳下〜を今
〜をとる〜して四季神祇新教戀
述懐人偏禁庭居所山類水辺魚虫
乃類い禽獸木草雜物の類とわらわ
連歌安心集と名つく志の所と事甚

いふよるま〜を充漢の原もある〜
祇よる各海尺の軍詩歌物語故事
の類出所た〜の附合ゆ〜書く之
〜る〜る〜

安心院

寛保三年乙未四月日

兼門重清

目錄

春之部

甲乙唱 若水 冰樣 山新 白馬 縣石 賭弓 若菜

女艾毒 芥 菽 蕨 荳 芽花 若系 若布 土葉 野老

母子草 寸黑羊 東風 春雨 春月 殘雪 友待雪 仙別

仇保姬 糸批 陽燄 燕 雲雀 蛙 白鳥 蜂 苗代 紅梅

初樣 糸樣 八重樣 火樣 皮樣 為樣 為樣 家樣

大樣 迂樣 桃李 唐桃 志之 柳 曲水 三月盡

夏之部

更衣 四子 田老 鶴 夏月 卯花 橘 葵 祭 杜若 牡丹

標 花之 未摘花 菜玉 夜虫 五月雨 木下 鬮 翳 夏

床友 松子 石井 百合 系陽 水葱 沃浮 菱 海松 谷

蓮瓜 茄子 竹子 水鷄 蟬 蚊 火 蟻 鮎 繅 纂
扇 水 室 泉 清 水 白 雨 納 涼 水 板

秋之部

夕 稻 毒 一 柴 桐 柞 楨 檀 楸 薛 楓 推 栗
柿 桂 檟 蕓 蘭 刈 蓋 月 州 香 芋 蘿 忍 草
思 茅 芭 蕉 於 膽 狼 一 村 芋 系 蔣 志 蔣 荻 蔞
あ 荻 放 生 司 召 秋 月 三 月 弓 淺 月 斤 破 月 夕 月 夜
居 待 月 夜 待 月 十 六 夜 有 明 六 日 月 九 月 十 三 夜 野 分
松 虫 鈴 虫 蚤 蓑 虫 蛭 蛭 虫 玉 虫 山 陵 多 小 陵 多
增 子 鰐 伯 勞 多 野

冬之部

冬 月 風 時 雨 雪 冷 雪 霰 霰 炭 竈 埋 火 寒 之 明

仙名 列 多 秋 沙 鴨 水 奠 采 漬 神 樂 爆 諷 物 綿
歲暮

神祇部

祇園 官 社 瑞 籬 朱 玉 垣 鳥 居 注 連 千 木 斤 削

膳 祝 川 社

祝教部

佛 行 心 悟 因 加 其 曉 寺 室 鹿 野 苑 念 珠 拍 系

黃 泉 羅 林 六 道 彼 岸 石 床 山 伏 優 婆 塞 尼

密 摘 蓮 上

述懷部

翁 隱 家 遁 世 雲 隱 紫 雲 菴 衣 推 采 袖 墨 染 袖
塚 奧 擲 卒 赴 婆 死 出 山 地 獄

戀之部

妹 肖子 吾妹子 婦人 他妻 妾妻 拙女 妾君 婿
 化人 一衣 笑 待 別 逢 不 逢 恨 物 恠 歎 偽 物 思
 見 初 濡 衣 立 名 記 念 忘 形 見 占 魚 云 妾 彩 枕 難 面
 垣 乃 見 情 移 香 文 眩 事 古 之 際 才 之 智 通 路 下
 細 亦 行 在 及 亦 在 親 之 際 中 中 立 之 亦 行 在 之 際
 上 陽 心 王 照 君 心 陽 貴 妃 心 季 夫 人 心 陵 園 妾 心
 人 九 武 士 夷 民 健 美 奴 國 栖 總 角 鬣 子 草 刈
 思 之 心 女 之 心 女 之 慕 父 母 兄 才 賢 文
 禁 中 部
 帝 大 臣 禁 中 雲 上 官 以 階 近 清 蘓 姑 射 山 四 町

仙宮 君仕 君之祈

居所部

殿 釣殿 樓 隣 圍 苔屋

山類部

島 端山 山守 山姬 山彦 洞 材 岨 九曲 枝折

水辺部

多乃 柵 水車 堰 笕 井 杭 瀑 温泉 潮 舟 橋 岩

柁 丸木 柁 舟 渡舟 貢舟 采舟 舩 朱了 舟

棚 小舟 藻 刈舟 入海 入江

魚之部

魚 鯛 鱈 鮒 鯉 鯨 蛇 貝類

虫之部

糸乃白衣 蓑 家風 塵 東西 南北 鐘音
 千歳 心と一 合さる 裾野 此を行 鏡向
 表 弓とや 夏宿世 鬼 於四十 五十 六十
 七 八十 九十 百年

春之部

一 甲子唱 世乃治 中 春立 九市 今の終と思
 年中 春立 甲子 唱 世乃 治 中 春立 九市 今の 終と思
 甲子 唱 世乃 治 中 春立 九市 今の 終と思

一 若水 立春 氷解 心長 余池 河

千載 君の 心 氷の 解 心長 余池 河
 山家 小庭 井と 春の 氷の 解 心長 余池 河
 風雅 小庭 井と 春の 氷の 解 心長 余池 河

一 氷様 春年 治る 世 春の 朝

年中 春年 治る 世 春の 朝
 春 年中 春年 治る 世 春の 朝

立神の正月のふりかへりてかきし地を傳ふるに代りて

一 聖新 卯枝

年中 百葉ありのつふてかまはる民のふりも後人にまわ

一 白馬 中井彦 水階 卯枝 野乃下彦

新六帖 又後と皆まらるのけつらめとけしけしけるる司う那
家集 松乃米のまよかりぬまきとけしとせりや子目まきとけし
夫木 山山守の妻より初め身守もくふ海ら白る

一 縣名 九重 祝云 玉を 酒砂 秋雲 志を世 友辻

年中 八角か君のあつらわうい百直にお一保名をゆりき

百よあるの山ういひん^{上三} 度よも志火の秋まうめ^下
付くく^下 庵土の飛火の故りといはる^{上三} 又松浦
乃縣と云る^下 百味集にあつ
をいあ^{上三} 君のめく^下 松浦山治不風とけし^下
旅よ^下 瑞不心^{上三} 位^下 心^{上三} 心^下

一 賭弓 山垣門 九重 舞 安の 舎人 砂孟 昔は春日

橋川 梓弓まの目く^下 流人の黄よりともむらつる^下
年中 あつら^下 一の司と引連^下 下ある^下 三^下 三^下 三^下

一 名栗 難波 春日 片岡 伴勢 比良 布衣 小垣

川
去雨のやうとく行人よふを乞ふはまはたの川
千載
家集
いふらんはたの原は橋井の跡とてけり
し妻を衣笠出よせしつと神よも向ふもなきもせし

一葭

ま木

鶯 野上をに梢 故郷
山麓生み葭乃を立にけり
度乃面よをつなみの花乃を
山高み林乃を
遠望樹如立 薺 礼記云 靡草死 變秋至

一蕨

たふひ 吉野 布衣 武苑中 志めし系 矢田野
小地 伝吉 志望 小地 宇治 春日 舟出 富士

玉吟
ま木
朗詠

朝原 山残 紺子 瓜木 山畑 柳 谷陰 外山 宍竈
木下 世持人
とて
山伏の石よりおぬ早も
山根を打つ山崎の海も
紫塵 嬾蕨 人拳 手 碧玉 寒 芦 錐 脱 囊

一萱

小井 芝生 石田 伏見 井出 小野 布衣 大系 奈良
三徳 井 春日 朝原 鈴松 山吹 花 菖 し 芽 花 紺
草 荏 草 枕 浅 芽 蕪 田 九重 蓬 伎 杯 古 沈 妹
垣 根 蕪 下 宿 高 拂 神 七夕

愚兼 萱つ正沖人の庭より宿りて衣をとりし月ハりつ
口 正しん橋花をめで衣衣とすもかろしつ後不月艸のむ
末 老ぬれ花の故よあし侘下山よ寸をれとすまにる思
三體詩 秋館池亭荷葉後 野人籬落萱花初

一 芽花

君くめ家も自もさぬまの世にぬらつたうくくま
新六帖 乃の六芽生れつふぬぬるめくくまの子もくもまにせん
子仙 つ花ぬく石田の小中のつが萱白ああつた約もかま
末 くとあーやまわあろまほくまの子花焼のほまきつ花ぬ
口 花ぬぬくけぬの芽生つが萱もまきつたはまてうかま
口 つ花ぬく小中の芽生あせぬてくくくまをまかきぬ

口 春雨のちやゆめらるるまをぬくは花ぬくぬくゆめ成るる

一 花見 花見と清武苑中 麻は雨後浪 萩野古堂 蘭

新亭 一つふもむしむし生るゆめはあけを君かきし人かえぬ

末 糸の糸をよよこゆのま約き草のゆりしつをくこま
名家 むしむしゆの根をよよこゆのま約き草のゆりしつをくこま

一 花布 和方浦 くらみ海 くらみ海 くらみ海 くらみ海

名屋 友
末 陸奥の色こころはさしあけしつあけしつあけしつあけしつ
万葉 つのゆめはゆめ人のまをぬくは花ぬくぬくは花ぬくぬく

口 おまゝに夜もろもろをこりく破さしむるはとては

一 葦 浅き舟 矢田野 弓

葦 棹娘の髪かよふを待つくく一雪のふかき葦の葉の
岸 行山後くあつたよせにふかき舟にまはしくり花

一 野老

夫不 拾を 人の余を谷山はほろくくまぬるおのあつたあふ
妻の地よこを求せしよまふに二人をくくくくくくや若

一 母子草 浅野 老いあ

妻 君くあつたよせよまをよまをまのあつたあつたあつたあ

口 ちこつたよせよまをよまをまのあつたあつたあつたあ

一 寸黒草

後拾を 塩川 小室原にこころあつたあつたあつたあつたあ
妻は地のよこを求せしよまふに二人をくくくくくくや若

一 東風 春日 佐々山 牛宏 洞川 梅考 妻の父 氷解

妻 震くく浦よりまをよまをまのあつたあつたあつたあ

口 和衣の浦は泉島の焼くく焼くくの煙吹けつこころ風もく
岸 正土風のまをよまをまのあつたあつたあつたあ

一春雨

高安山 鐘山 常盤山 朝系 桜花 柳木芽
常盤山 百千鳥 燕蝶 蛙 音思 入相 吾妹子
妹よあぬ 吾消烟川多 母の緑 虎を 寄き心
春雨のやうに降よ 梅花 まるさうきく とうみりも
とふさあけあやふく 水の面は 秋抱乃 錦とそく
常葉も やう成行ま 夕うを 叶るの 日影ま 春春雨
愚孝 一とくま しのも せし 妻女 挿て 葉の花を せん
勢之 位あし 宿を ねた 妻よ みの 今ハ せり 寄
細く降よ 月の雨や 葉を 水の 縁おら むら せし 寄

一春月

屏厂 梅花 花幸 望能 鐘鹿 釣竿 舟
玉津治

残春 風雅 名号 未本 續拾を

中より 四方の 春風 吹をく 一庭より 可おほ 月夜ハ
おろく 八月の ねさけ 出はく たる 妻ハ 絶ちあ せり
男山 桜が 下り しまい 一勝 月夜 のけり ます くれぬ
よよ 妻の ぬおら 月夜ハ 庭つ 草は 系と 誰か たりん
老らく の心も 今も 勝り せり かの 山妻ハ 春月

一残雪

清滝川 小片雪 朝雪 桜 花 柳 木芽
川 村消 雪も かな へん 妻に 志す 一園ハ 桜を 残れ 系
山に 残雪の 白雲ハ 草の 高き に 清を せん
拾玉 足せ 妻の 残雪 一雪ハ 清果 下り せり 妻の 妻と

一女侍

梅の枝 妻の日

一雲雀

春風より草 庭中 夕日 暖 芝生 娘百合 荒野
予雀あり 原 飛火の神よ 家 行 中 せに 暖 草 草 掃
大和路や 香く 行を 寺 水 ぬらう 中 雀 鳴 あり
ひらり 鳴 垣 ちり つか せ せに 暖 草 草 掃
一方も 行 未も 庭 つか せ せに 暖 草 草 掃
むら あり 原 時 あり せ せに 暖 草 草 掃
中 雀 あり 原 庭 中 の上 せ せに 暖 草 草 掃

一蛙

六田 神南 俵川 三 湯 井手 堀江 玉川 小山 乃 池
泉の 室 昆陽 石上 布 多 音羽 小 此 沼 粟津
飛鳥 田中 井戸 大 沢 志 野 千 鳥 零 山 吹 か び ね
柳 蓮 菱 菱 鴨 雀 夕 園 夕 立 谷 川 葛 小 山 田

花 夜 虫 船 舟 編 柴 石 井 庭 あ や め 土 菰 菖 蒲
桔 梗 古 里 山 峯 ち ゃ ゃ お も た 板 井 清 水 土 井 池
か 川 鳴 あり 川 の 滝 上 の つ ー の 花 ち と ち ま も ち ね
ま ち せ る あり 田 中 井 戸 大 沢 志 野 千 鳥 零 山 吹 か び ね
苗 代 よ 心 の つ ー の 土 井 庭 あ や め 土 菰 菖 蒲
勤 王 と 孫 七 廿 七 表 ち と あり 子 才 よ め る 蛙 の 心 ち ね ち ね
庭 ち つ ち 垣 ち も ち ね 五 日 ぬ に 土 井 庭 あ や め 土 菰 菖 蒲
ふ り ぬ ち 伏 せ ね 土 井 庭 あ や め 土 菰 菖 蒲
土 井 庭 あ や め 土 菰 菖 蒲 一 一 行 ち 川 ち ね ち ね ち ね ち ね

一 白鳥 一 説 二 上山 三 空山 音羽

三體 田 家 無 五 行 水 早 卜 蛙 声

古六
各寄
万
千首
新撰
春木
二村の山乃を志しむ志のめらぬおとさるるおとさるる声
春日山とさきのゆくは探花木の咲くは白きあり 下略
むと川は流もさめぬ白よる井杭もさめぬささるるは乃そ
あもも老よやつも白もあつて一色に音あつたあ

一蜂

東玉ニハ蛇ヲスカルト云

愚家
夫木
三體
杜律
うに世と古金の朝よはつとらのはつた別ぬいよ物う
まふれはさう厚鳴のり子祝ほりし妹よあ守来に
皆蟻相逢如偶語 園蜂速去恐違程
樹 蜜 早 蜂 乱 江 泥 輕 燕 斜

一苗代

井子
愚家
全宗
松
愚家
堀川
井子
田子浦
花
君
去
苗代
中
新羅
山陰
吾
子
肖
子
詩
古
山
里
紅
白
不
妹
神
け
下
打
ま
く
入
原
梅
乃
古
川
花

一紅梅

新羅 山陰 雨 吾 妹 子 肖 子 詩 古 山 里
里も山を白ひはくすなれき井のこをめれ梅の影乃下風
紅よ白へ不妹と神けけ下打まく入原梅乃古川花

真 紅と雪とを記し父をたしむめの花よ八枝かうひくわ
月清 妻の池の江の梅乃咲一よりわかれき舞くふさぎ波そ立
末 白ひたあつちきものを梅うえの末つむ花の父よはく
六家 とうめ智きつく鳴あつて宿の八重紅梅の花臨殿し

一 初梅

初吉 けりき人こん人き乃へ妻を産ま国乃山のと山にく花
末 難波人振さけりそん雪う宿停約きもの神梅を
一系梅 古き御

一 系梅

玉宗 妻をきと梅さけいころ系にく柳う枝よ咲うとそん京
風雅 君う代よあはもかひあち系梅年の徳せ死君やかうと

末 ときも子らお松の山系さうと強ひまふ花うとそん
川 白川やちうふの寺代系梅年の徳せ死君やかうと
川 あすもこんあうと梅の枝細く柳の系にむまほやう

一 八重梅 十年流池 竜田 産の衣

末 万代の妻ももゆう八元梅さあま神の玉入る川に
川 うの梅う神の心室入や山う妻の目若れおまら
川 あさよりあうのあはれたをうにかさしお八重梅殿
愚孝 八重梅宿のさうわをうれをけ妻の目すひうわあ
狭衣 一きつ、白おこせよ八八梅こら吹風入たよわまをさ
六祐 へれえうの木の花も散果て八重梅からつき梅う

六帖 荒まの原の宿の夜桜の山にいぬきけり若は

一大櫻

ま木 山はよちをさへは一家大さく退るのれり引人も所
古山の岩根は伏せりさへ櫻がまみの内とえ我ま元の

一 辻橋

二村山 靴原 喜栄山 志山 九方山 山名 喜乃かみ
谷妹 倭人宿 志山 肖子 名をこれ関るるは 残雪
小地 布引滝 氷室山 立田

月清 常のひとくえき原奥山よこらあるるは遠くく
於玉 音羽山 弁花垣は遠山く喜と文とやあつた関
愚学 昔乃全のふはゆるは遠山く左に原山ゆきまは道

ま木

ちんお象山陰のまをさくく代を原物とるまもあは
蝉乃羽の落くれちおのさく櫻ねとふくはと花もなま守

一 桃

暗山 吉野 天河 新門 喜苑 常 垣越 山賤
赤苑 君代 喜孟 歎々 仙宿 砂酒 三日月
深谷 鶯啼 孟 曲水

壺川

薄くさくく山咲あ一家桃の花酔とすおち父も有る
咲よらわ岩井の水は乳るす子年よゆる桃の印花
喜庭まかくさちん乃のれ垣根よさるる娘り乃ちの

新六

笥より千代もま原八ま桃の花乃はうらに若く遊ん
ふやとまおのちとけは木垣ままおれららむありのたま
桃乃花咲や三月のころ糸系こののまも今さうりあ

岩宮

後撰 物にそとく御物を桃の花にそとく世にそとくぬ滝乃白糸
朗詠 桃李不言春幾暮

一季 斤山法

消きの雪とてほま「山の垣不ばまも」花山きたふ下
梅栞とれははく「垣の」すりの花と雪かといふに
桃もそよまりの「」たる細冠「」けるやぬける
瓜田 不納履 季下 弗整冠

一庵桃

新六 かつらろけつ「ひまはく庵り」此大ぬあぬを候ぬに
「こよもゆき」「とやわ桃の物をそとく」たよのこく

糸 庵まの吉野の山は雲もさ「こ」け「ぬか」り「の」るさぬ

一春下柳 回榮

万 百葉の天主人のかつ「も」家志「り」柳ハ「ん」れとありぬか毛
風歌 寺乃「よ」ま「の」世乃「と」う「や」柳雨「よ」ち「た」枝「う」ま「り」増「か」
梅川 浅緑葉のま「こ」に依保娘「は」ま「り」柳の「か」つ「て」さ「や」
於玉 行思のま「こ」柳の上「に」霞「は」書物「を」た「れ」け「り」ぬ「り」
末 ほと「と」極「一」色乃「と」の九柳「を」り「に」な「や」枝「も」ま「り」

一曲水 二つの後 ころ糸 詩歌 七采 みるら 桃 碎

末 桃花宴
花を「と」く「の」後「の」光「を」「は」る「に」ぬ「ま」る「ら」る「ら」

新吉
むきうに漸をもとるき二月八日入ぬる山のき方
花乃又入日とよこん末下に妻もたれぬるこ日月乃新
不皿のきうれよつたて産人の舟乃り正解るふふと一不恩
かき素うに巴の字水多絶をういをもあこん原妻た皿

一三月尽 着 歎き 多 帰 花も 残ぬ 時多 詩歌 常

雨 淋一き心

吟を 伊勢 浮撰 朗詠
嘆れもらぬる宿ハ行妻の古里と社ちぬぬる
ぬれつと志あておつる年の月よ妻いんぐもあつと思て
おめとを妻のかき下のり其日の父苦よこん原まらう那
常きあ又あつとんたを記妻の目と花の陰よりふふとんた
留春不用関城固

夏之部

一 更衣

天香久山 其之川 山橋 大夏 花の枝 蟬羽 葵 楯
柳 橋 能 婦人 花 余 波 父 立 進 位 苔 地 絶 子
忌 ち ち 世 ち 控 ち 控 田 墨 深 神 山 井 の 水
其之れを衣うて山向の卵花りも老かこひちあ
ぬぬと起別行ぬみかさのうおもたえこふもり那

夏 小 赤

口 ま 整
紅の八入乃の深に暮うれを垣の庭よる影可那
以荒き方白川橋交かて妻乃垣のよ卯花うはく
垣杯よ卯をうて雨衣よい家宿きる人と見つ

一橋

万 風 新 新
安於木丸取井子志賀大津宮毛智蓬う志ぬ
大門階百取大君神茶古印門田是侍る
おやめ忍草青月や梅橋村取早苗管山吹
寢覚時夜夢古歌金鈴君うま
万 風 新 新
時とぬ君うまやたむものくも橋よおうつる
香ととめ「じう」はゆれ家の風吹つたる朝のこら花
と花とぬる父とか「じう」は君まお橋の年をにに居

素 四 橋

小夜更下を橋は風吹けてこく侍人の来るかとをたり
拾栗採橋 盧橋花用楓葉表

一 葵

口 口 口 口 口
松尾 日吉 和彦浦 天河 斤思 桂後 紫井 橋
し女 宮人 衣衣 瑞 雅 能 祝子 村取 物 足 かり
車 よる人の水
おはくは仏まつつあひまきあらのつまにけぬ目をまに
川舟の味「う」の父よはうひまのまはか原あひま
まよよと「う」の父よはうひまのまはか原あひま
お見ゆらひとの衣打なひくあひまも原——白ふは
日く山うのかがりけりううかけておと神や知らん
神祭りまよみあれのかう「う」まをせうけつあやたのまん

於玉 夜木立座の中糸乃石の上にみらして父をたはねて
妻木 紅の糸串の糸をほめて情のこころもあつらふ
菫玉 折人の心をとらふ糸をたはねてこころもすく

一 標 中林 小中 行圃 賀茂 法方 杜 青 西 あり

白雨 九重 介 清 以 語 書 夕 涼

万 玉よぬく標を宿は極くまゝ山杜宇のれをたはんか
玉吟 棟候思へ糸をくほとまきほのゆりたは糸を添は
糸 立やと添ふの糸糸のおしら糸日新も落し一蝶の羽衣

一 花のこ 至江 中江 浅香 沼 菖田 池 芦 杜の 八重山 吹

雲 豹 音 野 鳴 鶯 都 人

万 女中も嘆はよせらる花のこまつてもあはれも
千裁 雲をとりむくひのこころもあはれはつら

一 未摘花 荒るる宿 琴 三 掃 初 嫩 菫 玉

古今 人よれはありの若しはあはれ未つむむの糸よ
万 糸を井の糸をたはねて糸をくほとまきほのゆり
係氏 法正は六門山をかくるや入るをねいよよは月

一 葉玉 春日 能 橋 大 暮 衣 酒

卯六 糸のこころは五月の玉よぬきとめしおは標のこころ
妻木 化は糸をたはねるも糸をたはねる糸の玉よぬきとめし
口 又後とあやめにほの糸をたはねる糸の玉よぬきとめし

一 隻虫 江は焼火 音羽川 柳 秋風

大和 つめたかたれぬきあひまひの身よりあたま思ふなり
江橋 八重府茂なる宿ハ復び一の声なりあまも人も
未木 友徳の細谷川をてり守和ハ美の帯正勝きとい乃中山
壬二 水多に浮れぬホー浪の上に思ひをつきりりなる交り

一 五月雨 伊勢管 伏見 そ六川 難波 びろ河 大井川 神の浦

木曾 浅乃 布引滝 浮橋 不二次 廣東を志のや
吾妹子 草庵 麻枝庵 卯花 向く 夏標 玉拍
入ぬる 百合 矢部人 拙木 父南 井筒 栄庵 早苗

兼花 松子 ますか 笹六 忍草 三月 床を 為作
昔や 螢月 ぬき 里 往來 純同 日敷 徳 旅 行 怪
淋しき心

余 志きくハそのつてあけあめまありあしと薄もれ
玉来 山雲美雪ハ後もいとすくろく人ハ此こたれ乃
後次 流滝はあのもろく山川も音なりあつるまきさのこ
子他 神代下ハいとくま原又月あのみさこに人ささる
山家 五月雨ハ山田のあま滝花子とまきハあつるま新く
未木 ささるあつるまは手流してぬ山川乃りすそいゆ
ハ 橋の白ハ梢まもつる山ほくきり声くほるあ

一本下南 水鶏

来 人志れ下まの首白りまうるにいと下つらん娘ゆりれを
口の申れ志けにいま一隊娘ゆりのあられぬ志の若き物と

一家陽 おつまや 友月 夜露 螢 秋野 夕月夜

今もりもきまもてあせこえともせん様一あらはに花は
志をつけや色はゆふあらしるるよふのよむの八重紅はさけ
是程と人のおもひ川上よ候つらんあらしるるあをれ

一水葱 いふの沼 田中井戸 あり井戸 杜若

こゝろつしは田代かたてふと、そきつ様よ空井戸早もせ
そのれと志しよあれ一苗代のこゝろつ下よかりの志あ

一 沢原 新の拾ハ 白鷺の 杜若

ま木 かりの鳴田中の井戸よ日のきつたもたうまの風とるほ
山かとのあし田んくさの志たつたかたつても拾ハの志あ

一 菱 金救池 志の沼は うきぬ沼 入江 こゝろの 水鏡を 夕立

池乃よあいのの波ともかぬまのいよのよあまの志生
舟をよ候たうも案一す月のるあま元舟やははゆら

一 海松 とよみ海 塩竈 志の浦 新修 伴好治 釣舟 帰雁

入ぬる磯 山名乃 簗し女 簗巻 湊侍 湊次 芦 吹飯浦
浮も 志初 志賀

万 大津の浦より千石をりてに山をよこしてかへる一子
後亭 くらよき山をりては松の千年と波に波よき
真介 くらよの南の風より紅い波のうらりてき、一葉のやの里

一夕負

小倉 養正中 行思 破尔ぬ小を 綾や伏や 蜩山法
三月月 卯七 介面 走方人 蚊差火 松子を扇木扇
あま戸 軒小家車 山初 其昏
日守 雪に志ほふ心ら 一山よふ 寝る 駈る 行垣
愚者 隙もなく 軒とあまら山よみの位おとふ 不夕負のむ
ま本

一連

夏田池 位若 筑紫山 勝富田 有教 古寺 夕美 小川
松子 村ぬ 声 指舟 魚花 蜩 風薫 心乃水

異竹し草

法師のふとみめをとてつよめ居

及松を 松をぬ山の松よりくつれて他のをちすといふをてなして
秋松を 風をいふ草の海をよ宿志め一海きまにかりの松を
子仙 くらよ松も松も志なる松の面ににまきつるよと松守月け
松川 くら蟬のころ所き世とハ知ちる一連と松守月け
松玉 荷をきよらに花よよきとれらハ守中よハ月をよ松玉
口 くらけもまの松乃久とまきつてまけまきよ守中よハ月
玉吟 音羽川をたぬ水をりてくらよまのま松は清きくらけ
ま本 波よ入海より西の山よ松をりてくらよまのま松は清きくらけ
千々 池よよ藤伏木鮎のくらよまのま松は清きくらけ
三體 藕穿平地生 荷葉 華過東家作竹林

整 思ひせめてうれーきとおろふあまのり人あまのり板戸に
愚草 木下うさしたくかおるけあけのよんあやめの水の板香

一 蟬

行屋 任江 松浦山中の杜 衣子杜 信田杜 気父杜
村多 山彦 山板 朝負 山 井 介 西 愚 寺 清 水 蝉
木引 扇 女 希 七 桐 為 七

千載

僕 漢 籍

新 於

橋 川

口 於 玉

と仰り京蟬の羽衣きてんれを枝よ女ハのふりゆり家
文六 拙まの海ちる蟬のしれくく人きほく死あわきり
琴の音よひきかよ松風をきくゆても鳴せは声り所
重せまのそり風き世よ六知ちる荷を移り人かまのち
何とまの約はほるし行るまのゆりくはよせまのまの
茂り合まの松の夕原思ひせまの声よゆけの

三 飛

口

ルのまのそり琴引山く人ハのまのちるても鳴のそり
萬頂白波 迷宿 鷺 一 林 黄葉 送秋 蟬
送 筭 侵 窓 長 驚 蟬 出 樹 毛

一 蚊 火

類 彼 住言 小 神 ち 雨 室 六 燭 炭 竈 行 螢 十 市
伏や 葎 扇 賤 久 負 竹 の 七 山 葎 際 塩 塩

新 於

木 末

口

己まのそりまのそり因故まのそり燭よかまのそり夜たの月
小山のまのそり音よき蟬 久れいまのそり管線う故やり火
去後まのそり付くまのそり故やり火と見ゆら八不二の燭まのそり
蚊の声よ八扇 神よの松 思ひ 蚊 子 仕

一 蟻

井 葎

蟻 浮 仍 臘 味 鷗 淺 已 春 声

約六 水音月の照日此のまらるゝとあけのけつら行らふこ
家集 笠作と切寸ききと朝まてあひきま川らふ蚊の上は
枕巻後 七まへにまうわら玉の結とぬきてあけとけしとまぬとまぬ
三歌 雲深猿盗栗 雨霏蝗活蔬

一 鮎

松浦川玉の 八井 玉川 変茂 西川 吉野 宇治 岸
柳 早瀬 月沈流 早苗

約六 山川の此乃木陰乃斤割はる鮎はるるとくふらるゝつ
口 ち山川のほろ小鮎のたてなりかとも濁せよとれはる
口 鮎をいふ流の岩つたまらりて家も涼きまらるゝ
六帖 朝をいふ次をまらる桂鮎のりまるところもらるゝ

一 鱒

約六 朝夕ま渡の川をたまらるゝとてあまきんはる世もら
方子 若川の鮎鮎もたまらるゝとてあまきんはる世もら

一 築

素 日向をよ神のまらるととてあまきんはる世もら
田上平勢田乃川鮎もたまらるゝとてあまきんはる世もら

一 扇

天河生和原 繪物由の道門 舟渡者 表は 秋油風
国月朝 萩花 勝月夜 七夕 餞別 蟬 奪 以 後
鵜 流 伏 行 行 瑞 居 蚊 声 別 中 夕 負 舞 笛
篋 流 名 の ぬ 行 米 茶 系 築 築 行 舟 消 去 伝 電

青六月 吾妹子

白山の雪の暮あは寒くとも 形は風にあまきつゆけ
色訓つゆけあはねしむる風の扇の風にあけりき
あまき家代あはれたの風あは四方は深も先
眼もあまき一たさるあまき風あ舎りこ
あまき一こころ向うと鈴う山扇の風の吹は
あまきあはれたのこころとあまき風あ吹も
班女 围中秋 扇色 楚王 臺上 夜琴 芭蕉 扇 芭蕉 扇 緑 扇

一 氷室

宇陀 松崎 つけね 春日 小蛇 栗柳 夏目
暹橋 枝杖 皇代 綿柴 野鳥 谷岩 陰 岩垣 柵

東風 穴電

氷室山あはれたのかやうらんらん川原一
あまき河増たかひむら山はとむの中入悟
賢らあはれたともあまき一とあまき氷室を思

一 泉

龍泉 下 色 松 下 赤 色 鏡 夜 衣 松
にこころあはれ泉まうつる月をさし
つとまはる白はあはれた下あまき
あまき秋乃あまきく日とあまき泉ま
あまきあはれた泉まあはれた泉ま
あまきあはれた泉まあはれた泉ま

一 清水

山代 小壺 布 多 多 坂 三 井 山 裳 濯 川 山 吹 中

玉吟 淀川の入江の岸に柳陰つる舟はまきこけり星乃子
宿るに蝶の衣秋や玉風のまきこけり月乃子
夫木 樹をまきめとまきこけり家陰をれや浪打岸よりまきこけり
口 芝のまき山に松陰のまきこけりまきこけり音まきこけり
玉 月影もまきの長海つらつ川のかげ涼水の一の浪

一 山坂

志賀水瀬 志賀 墨吉 里表 湯 難波 大徳 毛香
作保 貴舟 泉川 之歸 田上 奔川 之谷 飯
布引 吉重 神楽 志井 蟬小川 清滝 滝崎 西川
平冷川 美茂 立田 橋小戸 天河 紅杜 幸串 七夕
蟬羽 志志子 川柳 榎麻 榎 螢涼神 水屋 月
志賀の心 志賀 ぬき衣 能 萩 蛸 園 寺 神

於を 山にまきあきり神もまきこけりまきこけり
新十 年まきあきり半まきこけりまきこけりまきこけり
山坂 志賀川の側を引細を大ぬきまきこけりまきこけり
口 みるたつ思心まきこけり川の底のまきこけりまきこけり
ま木 川の側を釣志賀人のつまきこけりまきこけりまきこけり
川 浅い川にまきこけりまきこけりまきこけり天の原に神もまきこけり
口 伏田まきあきりまきこけりまきこけりまきこけりまきこけり
まきこけりまきこけりまきこけりまきこけりまきこけり

秋之部

一七夕

富士 布引 糸の尾 みるゝ 立田 蝦 素古海 中井 庭
九重 川 傲 琴 扇 琴 苔衣 衣衣 初秋 短衣
鈴虫 薰 岩花 池水 急雨 庭灯 軒松 風 歌 行 合 七
水 子 草 尾花 一 葉 妻 池花 清 雪 弓 弦 月 羽 子 を
あゝ 方 笑 推 宋 神

万

詞花

新古

新勅撰

多仙

桑葉集

天河たを橋よとて七夕あゝとてさうんよたをこゝろとて
萩の味よすけり糸糸と毎うに七夕よとやけさいひくそん
織ひぬ今やとらるゝ天河川 霧まろく千冬素くちち
むつとしまゝいそきたる秋風よ七夕つめや神めくさうそ
君よあつていとい二日はぬめれとけさ素星丹心らまき
桑葉集かゝるきれ橋の後は七夕夜も更ぬとやけけとてん

素

口

口

口

橋

七夕も草まつりや天河秋よ下かよ一葉夜ぬく心
時乃るに寸と思て七夕よか川おまほ 松子乃も
かきけり橋の七夕乃思るおまほおまほ秋夜中よこれ
天河岸辺のりや暖ぬらんそよそ花虫よあひぬる
後ち舟よとてまの七夕の年よ多長き只よあひぬる

一稻妻

鳥羽 十市 葛城 有明 浅芽 かけろふ 荒方 宿 笠

山 彦 介 山 夕 園 山 伏 志 山 彦 侍 月 花 草 麻 屋

月 竹 吹 鳴 神 秋 風 瑞 雲 中 野 方 堂 三 子 孫

月 竹 侍 々 記 ま げ の も 乃 上 に 雲 と あり げ 青 の 稻 妻

終 東 山 園 の 彦 介 志 山 彦 侍 月 花 草 麻 屋

む せ 玉 入 や 成 あり げ 三 子 孫 三 子 孫 三 子 孫

秋

素

堀川

風雅

一葉

音蟬 初秋 疾凍 一ひやう

玉糸

山嵐よりきこえしとて本末秋をば日くし乃声

糸

夕方これ一とてつく本末より西を秋といつるこ日月

口

村を乃中吹じし夕より夕に一とて秋を玉のをやま

一桐

霰 表雨 蟬 萩 古里 軒月 秋風 井かき

銘古

琴 丸木 檜 冷麻山

風雅

桐のこもささかしくかきまをたかき人を得とをさしと

ま

宵一しよ桐のたもと風よあつて人の音をぬる夕暮

口

百葉や桐の本末は位を幾千年八竹のたもかりし

口

介面をささき下へ度とて雨あつて朝け凍きるを乃音

一柞

石田 花 行 園 泉川 之 海山 杉 柞 大井 二村山 浮湯

全葉

柞 柞 秋風 岩柞 月影 雁 麻山科

月影

柞を岩をささきし涼鴨をささきし柞をささきし

素木

依り山のささきし柞をささきし柞をささきし

口

松山柞柞のゆきし柞をささきし柞をささきし

口

神山のささきし柞をささきし柞をささきし

口

松山よりささきし柞をささきし柞をささきし

口

十市有る 交中 以坂系 高中 鶴野 玉洋園

一極

十市有る 交中 以坂系 高中 鶴野 玉洋園 二極

素 蘭きる人あつて行きのもよみ立校のこゝのから
山に其後うたひのしり行に傳ては討ちて紅糸の
云乃紫とよめあつてちよとれよま札ける極め一枚
小勇鹿の立中の鹿乃ち一抱色うくとしつて吹う
有乳山とよめつて一と回中ちる百枝の極も抱一ま
山保と忠のつれ一とあひあけつるそのま校す

一 檀 一 神 細川山 立神 行山 岩上 表虫 風 名芬 麻

素 谷上八世と其竹も時ぬき下今やまらのもよみまぬ
風海ら岩なまゆも今もやとらう一傳も引くあつて
小芥摘まら山田のこゝ塚まらその檀かまみたる川

東那のまらうのりこくつとたひあめもつて紅糸せし

一 楸 小嶋 上神 鳴海 佐保 水素 行山 松 滑 忍 籠 凡 山 後
時ぬきとよめあつて一 石井 為 蛸 凍 浅ら 鹿
新抄 楸まら川田の十名鳴をよ妹ら中けし月もる原も
ま本 ぐみ海一とつて立不後楸ないく方かむむもよめり
後撰 いたしする信川系のも乃上にもつて定れあはれ乃月

一 薜 葛城 佐保 音羽 筑波 神山 赤野 外山 卷向 松
神骨 月 時ぬき 行山 松 雪 葛 軒 持衣 涼 嵐 鹿
表 雲 敷 駒 松 凡 乃 也
後撰 勢鳴とよめ神の小枝うと枯て峯のこまうと父身よる

新後吉 志衣又まの半一ありの中山木の根のゆるれまらん年
打えつのはり坂ちる山をまふつて入つてくちりくちり

新六 奥山よまふ入つてまふたつてまふ物う悲し
深山のまふまふとくまふまふ

新古 日らるはてまふ人もの 山木まふの山乃音とらり

一楓 宇津山 志衣 山伏 草 行幸 担車

真六 志衣宿よもえつがへてまふまふ味とくつてまふ白の
まふ 志衣一極の枝よまふまふとくまふまふかへてま
まふ 友衣立田の山入らつて秋乃又まふあまふそのう那

一推 神山 伯州 小地 志衣 磐山 後山 宇治 こととく 志衣

雪鹿 秋風 軒司 川社 花 蟬 摘

新六 志衣 志衣根の根ま打まてまふまふ宿りの中くまふのま
新六 志衣 志衣のりたつてまふまふ片ま入向の峰にまふまふ
新六 志衣 志衣のりたつてまふまふ片ま入向の峰にまふまふ
新六 志衣 志衣のりたつてまふまふ片ま入向の峰にまふまふ
新六 志衣 志衣のりたつてまふまふ片ま入向の峰にまふまふ

一栗 様

新六 志衣 志衣のりたつてまふまふ片ま入向の峰にまふまふ
新六 志衣 志衣のりたつてまふまふ片ま入向の峰にまふまふ
新六 志衣 志衣のりたつてまふまふ片ま入向の峰にまふまふ
新六 志衣 志衣のりたつてまふまふ片ま入向の峰にまふまふ

来
口
袋

蜂万らふかよとてつれて青の雨をたてて葉
かこたえたるも葉のしるもきうゆとてはるるも
風吹て先かたれぬる葉のよによろりうたゆた
似たるはまき人の字跡よまき蕉をたたくてぬ雪
摩結と云者雪片はまきとて給よ書らるはて
まきぬるよまき

一 秋膳

永宿の花

まは
負弁

アまはんを名のとて秋の中乃千程のむらさきに
アまはんを名のとて秋の中乃千程のむらさきに
アまはんを名のとて秋の中乃千程のむらさきに

一 狼

三月 鶴野

まは

かた田よまはるむつらぬほまおの世をうたふ秋果ぬとや

第4

老て世よまらぬもまた狼田の香をうたふ秋果ぬとや

一 村草

は襖 二家の二草草刈りて君つたちれぬ物もこぬる那
まは 君うたへて村草中乃青のまを以て世をうたふ秋果ぬとや

一 糸草

中島の海 横濱中

家真 化一の中風よまらぬ糸草を以て世をうたふ秋果ぬとや

一 志の海

信天山 小倉 毛火野

襟衣 まのまをうたふ糸草を以て世をうたふ秋果ぬとや
口 一とておのひまらぬ糸草を以て世をうたふ秋果ぬとや

後民 ほよぬ物思ふ〜志の草まねく枝の葉まけり〜
新勅 冬よけ交神の小神の志乃草かよぬ悲の苦〜

一花房 小倉清又園 竹中 青月 林の中へ 妻社 忍系
さあ 日の方よあけよ 秋の花よき心をよす風はくち
冬 秋の神の系枝 枝りも落かよ出くまねく神と元由ん
は撰 秋草よよとえよれを秋風の吹くとき空ひく下ぬ共
末本 し女子の神より山乃花すれ雪打れ心ちるをよ地

一かゆの萩 冬 冬きゆみり〜あ〜秋よに家とま〜風と信と君と
若 古里のな葉の小萩 嘆〜よ下萩の〜夜よ月を梅よ

一放生 秋の宛中 神垣 月をり 川辺 文久
年中 世よかく〜つ〜さ〜身もま〜く〜を〜放神乃惠よ
初六 男山秋のまよとや〜く〜川流よ〜馬川四方を鱗

一司石 大井川 梅花 君とれ 孟元 九重行来
は於 川舟よ乗〜る〜の行時ハ志つら〜とを〜お〜ほ〜ぬ〜
於を 司石より〜人〜の系枝か〜せ〜ま〜ら〜に
洗よ草ゆ物と〜る〜乃〜ね〜も〜と〜う〜を〜交〜と〜る〜ん
大江奉 周司石より〜ら〜草梅の花と〜ん〜つ〜よ〜り〜係
風旅 思〜る〜ま〜とも〜方〜ハ〜お〜も〜ぬ〜時〜を〜下〜る〜よ〜は〜る〜を〜ら
秋よま〜る〜ふ〜あ〜と〜云〜ハ〜つ〜さ〜め〜て〜行〜く

一 秋月

万 みる月よき男たち守国はるも家よりもの
はたき さらんじうの人も家宿は只秋言ハ秋は秋月

一 三日月

る山 秋心づり 玉露 彩露き 瓜木 きまきり
下萩 木柴 山摺 崎雨 曲水 花の香 秋を去
青雨 松生 雪 花露 音神 一茶

万

月立一具三日月の眉振きけきくむし君よあはれを
山家 鶴伏 刈田の根生おくほのひつりく日月まかけ
愚系 木のりりる坂のさうすたさ月の秋あはれ秋をいむ
外六 三日月のけりるこれさにくさおほるる才とまきと生らん

素 みる月よ紅白より乃花むくもいよほされとて思ふ
於玉 二言 あらうち心心の猿了意なき二日の月乃中かたて

一 弓張月 入徳山 矢神神山 初秋 坂厂 四緒

新古 委物やるる山乃中よりあはれさうそよ弓張月
新六 山乃そたに丁崎 海ら電るるそと秋のみのゆるるそり月
山家 弓そたの月よをつれてるしけのやうりーいづり忘ん
ま 夕去や入はるる原白まらとて思ゆら月め山乃そたに
外 弓張の月も入るる天河やまの清みよあひやまよりに

一 片破月 山家よりあつり卯の月をててよは原

今味 未ちりち片破月のほろはも誰か思ふるよ

後撰 君の川とてて休まよ木のたにうまぬるす六夜月
約十 船倉のえとをよつたにまよつたつるさよの月
思亭 淡路の秋を花をかきしあつたもほつ十六夜月
素木 次乃浦天のつゆも色すのほつ十六夜月

一有明

吉野三津淡志賀八戸野立次二見浦 奥夷鹿
花雪 霧 岫 稲妻 施 吾 旅 祇 村 人
花 林 寺 杖 尾 花 松 虫 白 兼 楮 卯 花
後 衣 一 飛 面 杜 中 中 後 花 山
世 成 青 き ち ん と 思 立 ち ち ん と 思 立 ち
有明の月よふよふとてつる山らの夜ぞらまよつてくへよ
去れ伏林の草をさす月影をほつる明のゆき

有明の月よふよふとてつる山らの夜ぞらまよつてくへよ
去れ伏林の草をさす月影をほつる明のゆき

一十月月 船時を友和妹国

後撰 けつれとたのめり人いまつとこをの月影のうら
約六 分面するあつた村をて成後とらつても月影を川
名号 志乃川をやく小舟を舟更とて日の月乃海よいて
老葉 あま小舟をの月影のうらとてとる女君

一九月十二夜

千歌^清 くれの秋とくにふけき月歌いとおまじつえおとく
風雅 芳れ秋月乃まじつたふねとも史きつるは備ふらるる
山家 と宵にこそえふふは沈月のひよりあはれ菊の白を
愚羊 山う勢八月乃さるるをとおもふ雪の本味をさるる

一 野分

篠原 見陽 小宮麻 千穂 才枝 玉戸 東定 山望
志高系 志高 志高 志高 志高 志高 志高 志高 志高
花橋 飯房 よりの電音
かた人の野分よあふふ古きけと吹せを我若くする
神さるる父の神は是をく震ふ似る秋のしづかめ
きのまじつ芳せよまじつまのたも神さるる鳴る国の代望
思へく化ある物多への今野分乃凡り秋の上る

約六

神さるる神ははのちりるまうれつ勢の神やも任や伝め

一 松虫

音羽 嵐山 小野 篠原 代本 見陽 志望 小野 音
尾上宮 志高 有柳 男山 め希也 柳 志高 萩
系原 小進 尾花 神風 雲色 破辺 夜とまふ竹
はたを 糸の紐とくしよはな千代松虫の音うきこゆ家
松虫の鳴とを何きこふん古き芳世乃ののまみう成
山望にこやわわの志まじつも美村とに千代い乃るち下
ゆきぬまの志けき産まの神さるるかひぬまの申乃声
琴乃音にかよふ六峰の松風成松虫の音やそん

一 鈴虫

交也 不破園 志望 山 神系 山 奈良 鳴海 志望

古六
 蛸川
 けりよとつれくさきつる鈴虫の声さるるよ調こく十
 事、世の事す方方をあはれ心もゆぬれをみるん
 萩乃枝の下をを宿く鈴虫のうら枯りて秋の悲死
 けりよとつれくさきつる鈴虫の声さるるよ調こく十
 事、世の事す方方をあはれ心もゆぬれをみるん
 萩乃枝の下をを宿く鈴虫のうら枯りて秋の悲死

一 蚤

水蒸虫 中絶の序 毛多文 滋源 浅く 松子 尾也
 けり萩南 月夜 片山 隆 壁 障 紗 紗 髪 蝸
 去 高 古 花 氣 衣 片 委 小 遮 菫 七 可 蝶 月 教
 吾 友 松 月 寄 寄 心
 夜 景 に び び ぬ 早 き けり 毛 多 文 毛 多 文 毛 多 文 毛 多 文

は 松
 玉 葉
 風 飛
 玉 吟
 素
 朗 詠
 三 籠
 ちけやなけ花さる松乃蟬過河秋多るらり所き
 秋風のまをれうさう吹まよをまきいき蟬まき
 きりりまを多いつこそまもち白まのを秋の和け
 到て安老の松乃きりり寸なるん決の哀ともとく
 時多ち大池小一垣板よ下志のい音は鳴きさる
 那や空をに花をまらうれ蟬あがりかひはまをさる
 きりり寸中おの尸に何こいむかへのをよまをさる
 牀 嫌 短 脚 蚤 声 用 壁 厭 空 心 巢 孔 穿
 人 在 定 中 聞 蟬 蟻 鶴 曾 搦 処 掛 搦 猴

一 襄 虫
 檀 枹 松 木 柴 秋 芳 柳 萩 古 室 板 石 時 雨
 鳴 音 短 于 秋 之 震 鬼

一 玉虫

赤果

とちまていふやうなけいさる玉虫のたれもいふしむとをば

一 山陵を

玉柴

約六

築の内もたれうまきううまの築もくちよふたれ
山かへま守るるまのいふいふのいふいふいふいふ

一 小陵を

松玉

約六

ま木

推下校

まきてもいふう一人の山にいふいふいふいふ梅のま枝を
めやまのううううううううううううううううううう
を山辺の嵐ううううううううううううううううううう

一 増子

ま木

口

一説うその実名
トリアキ

まのいこ一梢のまを思へて校ふもきあふ思まてか
まのいこの思へまあててまて校ふか(傍こ玉柴いふ)

一 鶯

山家

鶯のいふははうふてうをたむまをえはむ心家

一 伯勞を

秋成

秋成

秋成

朝原まのいこ尾を君うま雷枯中松虫

校折秋一村落青雨垣根賤の庵栂四子田長

まのいこのまのいこのまのいこのまのいこのまのいこの

風雅
約六
家持
田核
野の栞正本乃未染秋
けつりや烈き物の松も
抱らる栞のりま夏の秋風
はあふれりまを鳴き
常れ梅乃花並ぬいあな
まうまはるはら音も
及舌無色諛人在側

一 野

猪名野 土中 深草 安積沼 布多田 雲色 忘水
沃中寺 柳 刈田 雲 尾花 月 草 松
あふれり伏見氏里に立野のそつこはあふり
いあきやふあふの宙は伏見氏かたぬき
いし生る
小夜実つ物りかきき
きほの百羽きす
野は風は
杜や何と一巻をか
らんらんらん
く野はあふり
ま

冬之部

一 冬月

玉味
於を
櫛焼庵
雪を出てまれば
侍一冬の月風や
雪入雪は
はめた寺
心かくて
まりあう
らん
冬月まの花も
あふり
あ

一 田

生田 立田 大原 栞系山 老曾社 首城
深茅 白川 関 飛鳥 有乳山 月桂 松垣 長寧 忍月
於極 長月 長戸 鐘 萩 萩 長見 長和 雪家
長月 長戸 長戸 長的 麻 核 滝 長 長

冬

笛抄人

新勅
子我
後古
風雅
月清
愚孝
来

古里美田垣の鹿のち―抱ひらとち―也秋乃こく―
山と多窓―くくく―風のふくたの日のくく―は色
作石田の神のこく―は山吹のく―かふし―
こけて神の神の父のまのこく―や吹ひまの吹ひこく―
風よつれなく―奥山入松の木末を雪をれまふ
家后―つまかえりも―まの山内風の色
いふあ―れま―まの時―ま―まの風

一時雨

小倉布板板 吉野 三笠山 衣衣杜 伏見 伏保 志山
神音月 志木板やまの形 夜見 夜や 萱や 針戸
深層 東の板底 采 楯 鹿 松 風 小 橋 楸

橋川
愚孝
来

鳥木入日 橋川音 神洞 蟬声
かろの―き―と―と―たの―ま―の―系―た―よ―
木末のまを―と―おの―ま―の―洞―も―物―有―
は―も―打―ま―ま―を―付―ま―ま―
嵐吹まの雨乃まのまのまのまのまのまの

一雪

万
詞苑

小舟 春日 音羽 依中 依伏 依保 依保 志山
之室 志砂 枝若 笹系 交中 葛城 天河 武蔵 志山
去り 記 冷 園 小 庭 室 糸 菜 柳 様 梅 楯 菜
鏡 是 松 麻 衣 鶯 千 鳥 枚 戸 志 庭
志山に大雪のふり―大原のゆり―志山に―ま―か―
詩人乃今も来―ま―ま―ま―ま―ま―ま―

白雪 其のまは花も梅も枝もけりて清く松のしる雪
 降るのむ雪のまこへつるを清行方と年にもり行
 白雪のやうなまねの面よとていひつる伴のゆ奴
 松と竹とをまきつるは冬にけり氷わら雪は消やぬ
 折るぬめりりの垣の卵花とていへく雪の山もつら
 嶺の山立並棹乃のりなれ日とて雪に下るを
 口奇の地よなむく落雪を雪けのまことたれつる
 雪白ふ西の方山辺をけりてまのこを神とて乃と科

一 淡雪

矢野中 有乳山 春日 布敷 八橋 奈良 卷向 檜末 花
 中 淡 破山 小松 雪 疾 燒 系 与 介 沖 津 塔 谷 冬 葉
 松 唐 物 思 心

万 師をよハ泡雪降とてぬりも梅の花咲つぬめり
 口 二家肖る成りつとてなれは淡雪ふれをほほと
 續は 竿娘の衣と風吹さすかきとて神にまの雪うぬ家
 源氏のま雪まらつて富土乃山白出とつるを
 披衣 づとりの消もあまの淡雪は烟さすの山とてゆを

一 霰

新千 天河 二村山 交野 志々 麻 池 枚 枚 茨 茨 末 末
 柏 桐 末 戸 笠 枕 枕 正 木 時 毎 雪 棚 之 小 舟
 荻 菰 末 戸 づ ぬ り 花 萩 石 鳥 浅 山 首 権 末
 末 あ ま 唐 指 者 多 人
 小 笹 原 末 一 系 尾 花 の 冬 づ ぬ 青 も か り け 降 あ る け
 園 乃 上 末 鬼 たり 子 長 末 末 と 妹 と 今 表 河 止 末 末

山家
ま本
詞花
去雨

山川の若きせりてちる浪とあふれとせは交はる月
音りし出乃たぢふ亮をそきさる岩の友と成るれ
跡乃の上にあふれ後こほりくは拙いぬき心こころ
武士の矢をまたたぬるこま乃の上ま亮たぢはちの影

一 雲

小池
ま本
口
六帖

小池 春中 那智 有乳山 三陽 住吉 焚た 柴店
竹並た 春鳥 竹た 松た 山家
みとれは花田の社かふとをこりきまきとて社中
雲あふ雲下の山乃返りみらむとるゆるそれ山
さし山たそそれとそれ後神下りてあふれこの交
ふもみわつたの山さふみとれ一ひく方もそ物そふ

一 炭竈

新千
如川
愚茶
ま本
口
山集

大原志くた 笠取山 小垣 筑波 尾上 松物 寺
ゆや 麻衣 蕨 蚊 火 立 雪 山家
かくつれ世よすこふの果もうけはぬ思の烟く今
次への浦は地やくあゆの烟くこそまうぬる小池の炭
回とめら民の煙の程及て中なる山よかよん炭くぬ
炭竈も氷室もしくは小池山火と水と社降えん
雪を社つとあまつれ市の南門のかち降よそれ車よ
らうまう可た名は月さうて冬をやくふ小池の炭焼

一 埋火

風雅

雪花 国老 雪 臘云 冬 扇 占 友 晴 ぬ 冬 梅
二月 雪 夜 神 音 地 下 行 々
昔やぬ夜の光を雪に下りて奥くくちる埋火のり

墓
埋火のあつたところを思ふに
ま
ま
口
口
山にむととめらむ
火も板も風吹を
火の氣よかよ埋火の妹も
打白よぬを墓の下に埋火
山にむととめらむ火も板も風吹を

一寒

真
ひよ下秋の中をみま
今も

一光明

朝日乃里 鏡山乃山 交中 白梅 若乃副 乙女 棟
百委 山指 山後 酒 舞 清士 山花
長月の光明なる
今も

日
素
年中
新
法
年中
素
法
年中
素
法

一佛名

歳考 屏風梅 中上人 法師 三寸 古寺 朝日乃里
を備 園加 密 東琴 栢梨 菓
年物
おま
一と

一 神系

首城 八幡 住吉 九重 瑞籬 白史 砂酒 月
教定 翠 潜

坂川
夫木
月信

千早振神の惠も夜火くこよひのかきあつめ六
喜田山もま人のあはれしつこふ棟を喰ひくす
神垣の山を乃溪のて風は波も打くよまかす

一 爆

坂川
夫木
月

山を坂川 玉垣 宮居 池菟垣の櫻 木綿竹を
かす神の神も從そまのり乃付のまつこは火白くたけ
かきま神もあつたにんゆらとからけ夜火赤くもか
位より夜火乃まののれとを帯とちん五更乃早

一 観物

松
新千
夫木
月

中上人河竹学 大内 男山 木丸 鼓 琴 玉笹
十寸後いかにかよ赤軍声もとれよる冬のゆほの
君らめ千代のためと求子乃かこよ折一屋の異竹
よよけ下棟といふ川社おめつきしは波乃鼓耳
ゆる神みくく川は新入下まを止めらうとるの
声

一 綿

新撰
夫木
新撰

筑紫系
長らうゆる不二の葉子乃新綿のまの雪はま似ら
秋のち長乃衣の一まもいとはけり風は才よ志
敷のや大和よあぬ者人のふりて種をよ

風振 霜雪に沖のちかた朝の寸時音も寂しむれ山が
新千 立よるく司くもろくちよ風のちかたのたけり
名号 名おまを飯山の山くはる厚手向の汁よふをいこめ

一 伝

宙原 三輪 常磐社 神功山 貴舟 賀茂 那智
歌 三津湊 三笠 八系 中々 八幡 水谷 祭
船 杖 軒 竹 蕨 代 いろ 祭 社 花 柳 神
早苗と原山田の笈りりよくすし志め纏よあすこり
新右 神垣や一衣の木のみーめま八千年とくけし世とれは

一 千木行削

後撰

住吉 熊中 伊勢 天降沖
久望の天乃おのあいくせをぬこもこも川の十木の行削

素

八つ山雲の橋入行をたのけ食れおのふいんをく
行をきやま入ともとのおおまはむむしけふ白兼めた

一 膳

年中

比良の嶺 油取川
卯花も沖のいりりきとてくもたにた中
祭を八月のとりをえとてく看も侍らるるまも腹き

一 祝

素

稻荷 三輪 春日 吉田 木乃の様 神示 柳元
燦 葵 山吹 鹿 清まじ下 舞 玉垣
長もまじりし沖のまも羽ありし清のまに宜杯敷
神垣はまじりし條の衣きし紅を素よまると人やすあり

集未考
は撰

例ちみ代之活位争灯あり物恠
係き兼又いと下紙ありかこち一情くぬ身、意を
うとそくつ行い山入横花きよの山幸の父おろぬ家
ま本 卯六

一 悟 管智将月照鏡 管 兼門 一枝花 寺 摩立向

千我 院心はらと云あうちあうと下の光あふん
心多たうまもはとこあはとたもはそりて
一房とたて多向る花の枝物ひとふやと成へき
花と月思へば一て行こふ是も悟のくしと
七の香とつと香行は吹きめつ物いと風入交す
はそつ心めらと健月は生入るよ山の理も
ま本 山家 於玉 後古 千我 兼門 一枝花 寺 摩立向

一 閑伽 稻荷山寺 横川 花 ぬる 杖庵 行 晓 兼侍舟

於玉 是やういさあゆの山は行心あうちまきいのみよくれの色
山家 控をいひおきたぬらきくは行は電はまぬお
横川 東と電と川せの氷あつたれと細きの水を汲を好み

一 其 曉 け 灯 行い 鐘 月 人 別 一 夜 心

千我 五更とさゆの山は侍道や若のいにもさ卯月
玉本 君う代いさゆの山入岩の空め人朝のはよあま
ま本 ころあいののいさつらつらあさみらぬ世も物

一 彼岸 足指山花梅

素 此の如き素乃半の朝日我まきし西の方よりくめ
川 といふにめりぬ物を長直の河一時ある月と花とを
彼岸 彼岸よ心より下し一あぬ舟の消しつゝに流るる水

一 石床 長床

愚草 仙もよびて等世の石乃ゆかきまに花に秋白の清く
ま みのつゝいふとせと古ぬく石に床吹ほく秋風
第六 雲深の神をつゝるせゆの時まのまも化つた居家
石床留洞嵐空拂 岸有仙室

一 山伏

吉野 吉野を尋かたの後 藤乃ち態 志初 首純 山と
破土 破 松風琴 求衣

月清 山伏出石屋の河は年少うう昔よまらうすゝめれたう
ま本 おやぬまう遊ぶうくくは車はよ心やそかたの有家
鳥未考 夕暮よかつた山のまの山とかりまゝに原はる音は
法華寺 法華寺めりり一あふるううの枝と折く
法獲 山幸子と勢ううもてて一あかふ山伏時よあふく

一 優婆塞 山幸 志や松 推か 松 行心 荒山 醫

素 川上やまきし志やせめらるる昔乃志をあすういそく
川 うそくう川まにきこふ心おのる山の雲もや埋まぬ
川

一尼

魁大杖

約六
口
伝
江

寸の條の父かつぬさけおまたぬとみ節よが庵きく
一節よみの障いとくしつ思ひまじくもるよつる
伝者民あゆとちあうしるしとをとり神とぬ
社殿屋よぬあふとにをある池の中流に松をけつ下
青よやね浦崎まよふ又保む心あるおま八位多十
見るさうし一し一を此後とまじ 朽跡松の浦崎波たぐ

一松橋

愛宕山 雲深池 曉記 松橋寺 為 麻衣 苔杖

松
松
松

山の松に 霰一友
山さうしつ松の花よちあまし松の枝よたむる白雪
伝あしやあけ花と松谷の水くし山入小寺

素

世さくくゆ人もさくくくくと見ゆらるまきまきまうやく山川の
伝あしやあけ花と松谷の水くし山入小寺

一蓮上

あまきまき
蓮上

松を
今境
老葉
はふらふらあかの命もたしつ蓮の枝まといまきんを
伝あしやあけ花と松谷の水くし山入小寺
はふらふらあかの命もたしつ蓮の枝まといまきんを
伝あしやあけ花と松谷の水くし山入小寺
はふらふらあかの命もたしつ蓮の枝まといまきんを
伝あしやあけ花と松谷の水くし山入小寺

口 世城背山六南の松尾よ昔めころもや表さしあるん
風飛 いよ入山路の奥の里まうふしころとらに教まらへ下
於玉 いき志わらあふいする「まほろ」此若見宿に山虎坑
伊路 羨うこそ何のあもん世方ととく控さ下ーるを悔き
大和 中ちう「こころ」以改よあ宿物に後世城背く家身之り

一 雪隠 羨花園 山宮月 二日月

六家 とめえぬ、のいりあはと妻めの家より生「中隠」まき
金栄 日のこり「あまねき」こころ「まゆみ」もあ身い「い」を後
新古 めく「あ」い「ん」や「ん」を「い」ぬる「い」や「ん」を「い」
羨家 流う宿仲の小路の中ら「若」よとを「い」行「方」も「奇」

一 山守男 倭人いりぬ洞社

西の荒 西と侍 雲の隠
羨乃花 ま乃内よ「い」れ「る」の「あ」う「の」こ「ろ」あ「や」ま「ん」
羨 羨の中よ「い」り「宿」業乃「羨」溜「ま」た「世」の「早」こ「ろ」を「い」

一 推栄社

全栄 羨ころも「い」り「や」ま「る」こ「ろ」七「夕」よ「な」を「ぬ」よ「つ」け「て」ぬ「や」
口 羨末ま「う」あ「い」の「な」「ん」を「い」ば「ら」ぬ「お」さ「る」羨の「あ」き「い」
新六 い「つ」こ「ろ」に「や」く「あ」ま「れ」羨「あ」ま「れ」「い」「も」も「妹」よ「色」こ「ろ」
羨氏 羨ころも「き」「い」の「よ」思「ひ」に「な」す「後」の「せ」に「か」る「世」

一 推栄社

千我 七夕よこ「ろ」か「ら」ぬ「推」栄の「社」も「こ」ろ「に」あ「ら」ぬ「な」

口 かしらふにむめりてんらんとていっへんらんはかう
たのりつと系 右梁塵思案抄ニ云々アリ抄ニウタ
ヲキツキ神ノホウヲ云々ルヘシ

一 幸敷婆 音ハ沈 熊山 押ハ定世

山家 哀とをたてし海は名とてめし紅糸うらふは共よなぬふ
素 知まじけしせつきのぬふ果とんよせのそとに敷ふはとて
口 後らりてちてそとてよかたをらん隣とてつハ哀ともなよ

一 死生山 海川 杜宇

詞苑 かつつぬまに足ぬるを死生の山雪かかてこくとすん
玉吟 とうけしや敷てうらみよせはは是より死生の山路をうらむ
任音 かしらふの山路とてつてあたらしく神代抄のまあむ

古今 さいきよのわらうらふはよまの死生の山とてあせがふ光をよむ
ま本 死つての山ぬりとててうぬかへつてはかよらへんあしとてあ
きとくあまての山路の松木切芥の剣よ才とてあし

一 地獄

古今 地こくの傍とてん
家隆 三瀬川海らとてあもちうらつて何よ衣をぬきてからん
全味 うた人の中より出ふ水未やうりせ川とてあ海らとて
浅きや剣の松入たりとて何のそとてああわあ成る舞

古玉 けりや宵まうありの毛きうし種を染に焼く此枕寄き
古六 玉きりち余まじりふふあせをいりたせよとう流ま行しん
新六 二承せこの流葉のちまにやふ乃まみれの父うはく果

一 音妹子 石田 まゆ 伏見 猿沢 宗良 名坂 鏡山 おやめ

萩 桂 南 梅 櫻 橘 櫻 南 柳 云 打 筋 兼
百合 鴨 卯 花 紅 梅 鯛 ぬ 糸 七 施 藤 芋

万 音妹この世乃玉は位々一昔もよ下つてしん
おひし志のまてまのこやまきも子う承家のいそて
後江 ちきりハわらむまいなる音妹子乃そこれ細よつ解へ

新千 たとよき方そまをれしはもこの種をれ葉の横乃也
徳川 けきしこの物價もる父きか承のめつめつりう小き

夫木 二承妹この初かへ委侍い山とて地を早くおやうる約

一 婦人 三浦 おきり 花 畑 雲 井 階 八 等 栞 柳 百 葉 栞 衣
施 扇

お六 たとやめはまよぬきり乃ち衣手のいよ心ハ承乃こつ
ま本 婦人のかさ屋敷日の粧いなま川あけてるら玉くけは
口 考とそや免の神打抄ふと承とそ承やま苗ハ栞もあつた

一 人妻 東や

お六 他つまに心あやまくかけしはあやうし物いそよそ承
お六 ちくろくのいそにちと承人妻のあし止るん物よあは
右六 人つまい杜り林りかす玉の虎伏中より夜つあらん

素 衣のいづらの神乃ちいふ人乃妻とて嬉しくし

一を妻 砂原梅麻七夕 粟花田杖

万 をつまとい花之つゆを衣に巻く音鳴きあけの世
とを妻とてありあきとて妻のあはれは月の西にや柳の
風雅 秋風の才も入るうたかたききつままに床の神足こころ
澁川 を妻にゆくのゆき仮初よ夏の中もあきとてうれ
川 白中の八雲の雲山かみぬとてうらいたくかたきを
の六 悲つま起てこころの神垣は西の川ゆきあきこころ乃花
ま本 をつゆのくぬ花秋の糸の細乃玉のさくこころを
川 赤門の千巻きとてゆきをよめ家限つまよきとてゆ

一花女

地上里 後山まきとて 萱津 小倉林の里 おもひは
小中藤原 之河 新波 浅妻 旅泊舟 志し別
とてゆき花

ま本

うらめめのうらめありて旅やうは身も物まき
後撰 たり笑松浦の浦の沖津舟より定ぬまきとてうらめ
嘉禄四 百首大井川岸の公ら屋の竹柱うらめまきとて
六首あ 東のやけ来りぬは打さつて宿りてめけ花まきとて
川 くれとてうらめを去るあまれ子も思へ浅きうらめこころ
うらめとてあまの子とてうら

一恋君 行約 一村芋 手列約

月とて丁田舎ちる男と思ひあてき一公
かを 今宵君いりる家望月とて丁丁ちらふとて思ふうら

名も言侍立一昔は今も去らば一飛足久し比つる候本

一忘形見 次中、妹背別久字繪 哀傷心

深川 立論下又やらまゝ一おもひけをと値う末のこまけりるに
古今 ありこそおもひ中ハたまはめせとて後の忘形見よ
智吉 思ひ方おしくは末の夕烟むとよもらへ一と可れりしに

一占 街大町 毎りにけけの格 定之よ 秋夕 ま川旅人

そ逢 住替宿

万 玉祥の乃行台ようまへて妹よあんとこゑまといつふ
月法と門は出立是台くは時をわ妹よあの子と
初半 陽ぬきとての台も意雨はたふ下は一き都よりか

堀川 叶はやく急乃ますしにこはちやぬき一きくと後にはつる

末木 思ひの占る橋よと一れよの人と成たのそまよとて

葉未考 ありきなくい日は立つ占とてか前記とにまきう

一恙云

玉吟 さぬくは行末くけくとも只時のるは情こまり
鏡千 ぬてしものやと恙云よま一傷人切とくは毎あこそ
初六 待えてもたういほ笑ひの云にまよは寝よあはれに
智吉 思出よたう恙云乃末あききらよの甲は決り山う勢

一爰 賢 思寝 之人 旅 待よる 長 蝶 思青 若 柳 庶

草枕

万 門きていふもさうてあぢさひつゝは妹入きてあはれん
川 夢よらん人をうらにえてよふ世もすなはれに
新六 又ぬもく守ぬもきく世間よ夢さうあはれ悟こた
月 されおぼの余はもさうたつ雨の夕も雪の朝も

一新枕 伏見里 御所あともまゝいふ中 後ろふ床 団の
船

千尋 ことせましつゝいさくとさるるもあはれはひの床より枕す
續古 己のちたよふと幸の後乃新枕定し年ぬ月日ありと
續今 流たよおとけしぬよあまうかきさるあはれも昔
新六 笑あはれおとけの流たよあはれをわぬる妹うくらかみ

一難面 才又秋風 螢 羨亦宿 蜘蛛 榎木 みる 尾松 眼

消ぬ命
つれもなれ人をさうと山彦のこゝろを戻まつて歎つる
於を 友の扇の火掬よ才と解つ難面人よふたもつた
續古 社宇をれよ何とつ時声の九月待るにほれなかり
續今 水を月の比蘇のこゝろにあけし人のこゝろに
山家 光さるよふつれなれあはれも下にかくを思ひも
ほれもなれ人よえをを榎花風に志すよふとよはるを

一垣乃見 喜日里 釣竿内 灯の影 媚く 暮若 生先 志ん
人

兄才 三れぬ
思とをいりてかひまに夕かきもなつる宿の夢をて思

一 腫云 七夕 秋夜 鴨羽に 東電

おつともまき月影のほろおきよ何ぞとく人乃とくれぬ
腫しとを、そつとも年とるぬめりぬ老を付て、まを
ま未 玉子つゝを花中のじつるを思ひた下つても行ほはるか
け 流るよまのそつとるぬ行はる人つてあぬじつは、

一 古き家、 化人 独夜 四鏡 うき身 引琴 詞

古今 人あり寸間と、とつてこゝとをちて、おれおれもう、おれおれ
おれおれ 原も若とも金もよあつて、おれおれと昔とら、おれおれ
古今 常れこゝろ乃春の古と、おれおれと人のほれぬあつて、

一 牙と 高 文 中 伴 約 浮 中 昔 杖 志 衣 取 蓮 徒 然 大 空

おれおれ 山と、おれおれと山と、おれおれと山と、おれおれと山と、
古六 天系、おれおれと、おれおれと、おれおれと、おれおれと、
愚羊 以てぬまを、おれおれと、おれおれと、おれおれと、おれおれと、

一通函 木柴 忍山 草 杖 釣 衣 柳 下 山 真 山 室 庭 園 寺

清又 昔 危 沖 妹 許 と、おれおれと、おれおれと、おれおれと、おれおれと、
おれおれ 池もよ、おれおれと、おれおれと、おれおれと、おれおれと、
月後 類、おれおれと、おれおれと、おれおれと、おれおれと、おれおれと、

一中立 恨心 ねむ心 恋心 舟のまつり

ねむ心もあはれの中立ト云 枚村の花ト云に吹あけ

一をかく下 中立の偽 若き若く 化めく人 供よとく家、笑悔音

一を増 ねむ心 後の後 別情 人 芳友 為家花

一上陽人心

金紫 上陽心 かく眉をまげりつた心 細も老よ 暮る心

彩子 上陽心 かく眉をまげりつた心 細も老よ 暮る心

末 上陽心 かく眉をまげりつた心 細も老よ 暮る心

一王照君心

上陽心 かく眉をまげりつた心 細も老よ 暮る心

上陽心 かく眉をまげりつた心 細も老よ 暮る心

上陽心 かく眉をまげりつた心 細も老よ 暮る心

上陽心 かく眉をまげりつた心 細も老よ 暮る心

一陽貴妃心

後拾遺 かく眉をまげりつた心 細も老よ 暮る心

上陽心 かく眉をまげりつた心 細も老よ 暮る心

上陽心 かく眉をまげりつた心 細も老よ 暮る心

上陽心 かく眉をまげりつた心 細も老よ 暮る心

朗詠 揚貴妃 唐帝思 李夫人 去漢王 情

一李夫人心

風雅 上陽心 かく眉をまげりつた心 細も老よ 暮る心

集考百子智うまひことよふ声きけ之時多とをまき次ぬ
ほくきんのみ美名うまひことよ

一 草川 彼思浅み沼 橋立 々々川 義豆中 小野 東山

じうの思かたし 鶴 約 苗代

草

草茂系乃刈おけて山崖に花をく人乃心とく又保

新六

以物中の草刈笛の高き声おぬる海とのよとてそ史

一 思とら 春日 兼山 萱 花梅 友の下 松 風と波 月 玉津 志

新吉

因としることま志し行かぬ花乃名り也中との者

玉柴

妻の中又心とんと思としきう今日苦すもあま

後千

おもふことしこえにゆらんまきれ 秋は花を友秋の夕云

子仙

思とらわたりさん出つしいあるぞ一云はえとを

一 友とる 山陰 舟 舟 月 酒 詩

玉柴

山けや友とる一飲わけて只いし一花雪は葉の月

おくれ一雪と月との父とめ一指もか不不妻の山陰

一 友と慕 松虫 持た 予 背 竹 琴 酒 詩

新吉

白髪を翹まうけて行丁の門田のおもに友とるまわ

一 父母

山乃中山 住吉松 和予 浦 小 倉 山 秋 波 津 浅 希 山 歌

吉野の津 花雨 松竹 雲雨 栴 露 照 杖 麴

金宗 玉のけり多きに塵もまきなり二親をうく身とを
たらしの泣はあつた竹の世もあつたぬれをなうらん
素木 赤家の門田のまをれいつらほをるにつけてもあや悲き
橋川 父立やきしちひあらんぬれもたきつりきめ布せりぬ
其行 時をちかきしちひあらんぬれもたきつりきめ布せりぬ

一兄弟 宇治 春日 位あつたふゆ ぬきよ草 茂に衣 宇治

たしる声 世は源氏 猫雁魚ニハカラトアリ

源氏 妹宵山源きをそえたどわ推かこのちりよぬと迷ひぬ家

後集 兄弟の中よりちりよぬと迷ひぬ家

一賢 学教政 竹林直ちる乃世撰人法入琴花山

梨壺 真物 世の後見 玉治 様

一文 位進 以階よまう登 以見 真伎 遣唐使 衣

裳をあつた心

二體 欲写 愁傷 愧不 文心

不 文 明 王 乘 多 病 故 人 疎

源氏 卯花 五葉松 雪朝
心ゆく秋ま川園を永宿のもみらの風乃つてよまも

一仙宮 兼孟 玉皇 千年坂 石床花 碁竹林 谷戸

河橋 拾木実

堀川 素行 彦彦乃を風に吹てし月も山やなく信山泉

口 又れもいふ為入まんおのえ乃朽けし山の流を忍ひく

口 桃の花志けすも谷にふ入る思ひぬ里に年々る屋にる

末 為んくこころをり知申の浪多あり乃彼の源よ舎りて

仙乃裁ぬいもをぬ神をてしれを井深に雪成るるん

狂律 仙家大吠白雲間

一君仕 花乃神 清まらふ人同思笑 月花も思恋

春 其れ玉園乃花川寺もてりて君にづくよふ川世とに

春 卯とた江のこほりふもてりて君よはけり京なるかてき

春 よらひ系もりすくよとて思まゆる板乃あてり

春 春雨乃渡やしめん

一君と祈 身と思 翁 神司 伊勢神

春 大方の秋乃経是も長也も君とすり身と思て

春 きよ成いゆるるの及も人さるれ乃實其朱の玉りきり

春 柳りやハ乃石ふと臨ちしきみとすり新ふ内乃美人

素 五のほろ烟す尺巾の炭の後の尾は糸の隠あしを
朗祿 可摺終身數相見 子孫長作隔壩人

一 圃

白枕柏霰 良杖戸扇 衾衣 衣紗 埋火
養管 厂 木柴 梅竹垣 崔 玉岳 人待徳

素

窓あけし山をくさるる圃の内ままをくさるる月とまの
中へ紅や月ハ灯かきしもわをハけくはる衣乃をくさる
妹くさるをわの風戸にいら糸し一日をたのむとさる

一 智屋

松崎 雄崎 象浮 次 厂 明石 寺 附 多古 田 養崎
古江村 音をぬ老 破 千多 螢 舊 和布 九 辻 田
心多に養の心も白まきし山にくす浦風くさる

素

八井川あめをむきよひ管やう短衣あめ月うよひを
作銘の海也泉扉乃若也松をに舟きりし原秋風吹
衣にけきみかをくさるしつあまの海や八月もまきる

一 畠

山類部
去の海 去業 旭 庵 下 高 寺 蓋 伏 猪 込 岩 兼
嶽 細石

いづつにあふ 荒れぬ畠并俺しふし毛を世にきり
斤山乃をやくあてか乃尺巾を山様よりきり烟や草

万 法くまのいそがしくもまて 杜きう山いともよめなる 海一やん
於 山むら君小も似るる 山ふふふふふふふふふふふふふふふ
終 山彦もたふふふふふふ 夕附日さすや 固思の蟬乃法声
を 山彦もたふふふふふふ 九よふふふふふふふふふふふふふ
口 常の鳴ひのたまぬぬふふふふふふふふふふふふふふふふ
多 山彦もたふふふふふふ 夕附日さすや 固思の蟬乃法声
句 天のふふふふふふ 山乃ほくまきい一書なけと二三ふふふふ

一 洞 銀洞 水原 永立社 龜尾 横川 石神 山伏 栲原 杖

終 六 菅原寺 録のほくまきい一書なけと二三ふふふふふふふふ
末 花ころもかきと山よふふふふふふふふふふふふふふふふ

朗 洞中 清浅 瑠璃水 庭上 蕭條 錦繡 林

一 材 小倉 其系 依和 中山 葛城 長等 木名 嵐山 柘

韻 族 人 火 名 山 岫 崎 ぬ 美 雨 厂 采 木 柴
谷 寺 山 住 滝 崎 中 約 樓

琴 山川の片乃卯花咲ぬて 依のふくまきい一書なけと二三ふふ
素 依泣しや 女 指と 中まよふ 女 ぬふふふふふふふふふふ
口 足川の山乃行合よ 鳴 猿の 着乃上 ぬふふふふふふふふ
口 千早 旅 神 初 人 けつ のふふふふふふふふふふふふ

一 遊 吉野 幼 殿 岩 津 水 立 木 魁 火 松 花 菅 蓬 山 川
井 角 梅 柳 斤 園 山 彦 鶯 鶯

五吟
斤山のほきけさや田を打く一まよや田子のみううん
ま本
行進のうささく下の木車さううのうまのくれか

一九折
山峯俯了山 懸地 樵夫材 山々 峻隣を後
ま本
九曲乃の行きの路さもせまにまきまらるるれあ

一校折
壽 志愛 忍山 花山 痛むやの園 志ぬ山 旅衣
旅名もきうぬる声 けま

係
返りし校折も雷にうひのれり 宿家 財のま葉
ま本
とくやうと一あやも見芽もまにまら果のじりん

六
ま本
竹校折 葉の小枝とふささく果あよぬ奥の志山末

水辺部

一葉
中川宿 山室 兼 地 淺茅 松 九月雨
ま本
岩乃ちる山橋乃うけんる中庭とまの深なるのや下水

一 柵

音羽変後 毛多 大井川 高田之室 山川 柵 康
木宗 千多 玉も 以後

愚系
千五百
荻家
ちと風よ井多の志うみを以てしとぬ父も山吹の
武川は月の志うみを以てしとぬ父も山吹の
流行亦みよ川と成ぬとを君志うみと成てとめよ

一 水車

宇治川 田川

口 素
早急流よけし系教と汲あけし月の沸か急水車六
激流よる白まにたて家水車せよ急流を以て社せよ

一 堰

鈴鹿川 柳野 柵 岩野 飛

新六
六月ぬよあつた橋は系入井川を急流の井園は寸斗よ

新吉
柵川

角田川いよはよが系白流の主取へきとらこころをひ
大田乃うらほとくつとたけけし井園に流を川との流

一 負

谷戸 田軒 寺 庵 苔 山水

口 柵
多き坂乃笈の水よまろ居ハ音羽乃山の木宗をよけ
を井のうけい乃雲ハたなきと素にはあつた井の約
山軍の笈乃水のせうきたたけの雨の月うやとれ新

一 井 柵

泊瀬 水 康 柵川 依 中 川 武 庫 川 勝 方 田
花 山 野 五 月 雨

玉吟
素
山川乃井柵の上兵血よる新て原交よ音美をえ
花山野系井柵の柳まてしと急よる川を以て素は志可

一 瀑 五月雨 夕立 村雨 蛙 良木 戸花

古六 君も又よを乃た川を秋乃夜の月をうつる習をく
狭衣 也保もまたのまさしくちんをさし川を氣をさくもあふぬ

一 温泉 湯 有る 卯石 三橋 治政 徳神 あり 兵庫 西海

築家 伊豆山 和田海 西幸 船 世乃人の恋乃病の業とやせら下の湯を涌かると

玉柴 扇よかき法を不 返きくそよ人あくとるにとくと給治を是より山を思

湯治を原人下

余 破まつて入江乃休のまゆ下君又不との命ともりぬ
素 己のくまよりてり思う人乃つくぬの湯乃富まらうたり

一 潮 零 ま 血

百六 川流まうくほむか不みやつくよすら方きんを
素 うしかくむ秋のいりぬ年うたつや、朽ま下小舟のほは橋
川 潮祢不がまとのりうつけとぬるみ雪もなきぬあまのぬ

一 舟 檣

素 ぼろしは竹のよ下総打をてつ小舟あふ浮不二乃川流
川 是乃あふまよあぬ天河交中よかけてまの舟舟を
川 山標のあしや後ふく人細谷川の流乃うよそ

割花 夕雲に依中の舟橋音とく手馴め約乃故も
東路のさびし舟より白浪の上よそかよふ花の夜こも

一 岩橋 久米路 葛城田池寺社

舟音 おとろ川せむ山岩とく一と地一たるたり一ありぬ
夫木 かまへし一井舟の岩橋たは深まてしも山寺候ふ
新古 舟一と思や下つるをよる深養とら岩の昔れ岩橋

一 丸木橋 洞川

舟 思川より丸木の橋とくぬとく一とをほぬ若く那
舟 ねえろ一やは深のうけぬ乃丸木橋ぬとる夜に岩の
家 古く山相乃古木丸木とく一それや翠今の音よかた

堀川 朽より人もがよぬ石上布多中の活よとく丸と

一 舟 志賀 幸濟 麻進風

夫木 吉野川大主人の御中よ舟舟あくとたををるる
後千 堀江よ玉一舟一と大君のみ舟とく一をよとく
主二 土佐の海よ舟とく一を舟とく一故の冬八風を

一 渡舟 富吉川 角田川

後古 花の父におれぬ指竿乃志つても白字
後林 若く代にあふぬ川の後舟とく一の若れなれと

一 貢舟 堀江

伊勢 草虫之く柳を舟にうつりて行くとありて一人もなき

一 藤川舟 音羽川 道平年

狭衣 藤川舟帆つて去り縋心とよ川をいりて風は浪よ高
ま木

一 入海 其野 汐満千 千多 舟

新於を ま木 入海をく成よと十溪若のそり乃さきこれの比

一 入江 大今 港 明石 芦鴨 蓮 舟人

は撫 玉津嶋あり入江をく舟の浮るも亦も亦ハと云ふ事

古今 大井川入江の松よるとりんか、京の幸ハありむりも
新古 今後、鳴きわの入江の溪りて尾花浪よ高秋の夕これ
ま木 朽跡神田の入江乃一り、乃入細も亦多ゆ下にき高

魚之部

一 魚 伊勢海 桂川 次入江 宇和島 松陰 小車もさき高

其川 魚をさき魚をたの釣をねやうけもひらけ止ぬへこ
新六 雨高るたのきけさる水たまたるを向す此世をねま

魚

口 塩の浦まにづと魚をえよたりしとも世にふ
 口 冬川の岸のくし水ぬちみえある世も多しは厚く
 末 白く魚の舟乃内入一社世成法にるま志家一
 三體 魚 依 沙 岸 草 蝶 寄 汰 流 挽
 朗詠 岸 白 還 送 松 上 鶴 潭 融 可 葦 藻 中 魚
 河 伯 以 魚 為 民 紅 魚 錦 魚 上 下 河

一 鯛 鳴海 堀浦 紀海 阿漕浦 日立浦 吾妹子
 万 水江の浦鳴り子うか川下下鯛釣り
 山家 震しく波の沖をさ下か事柄たつる沖津おゆ子
 終六 水を月や君う情よあひめくうてふ鯛は今もさ下
 末 柄たい花の名をれや青柳の糸成されてや人のゆらん

口 小たの浦かものあまもまこれ浦しとた福をさ

一 鮎 秋風よすくきたまま入思おもゆきん人の心し社まれ
 終六 秋乃秋のゆけの浦は舟や一十月もや鮎は鮎ゆらん
 口 秋乃秋のゆけの浦は舟や一十月もや鮎は鮎ゆらん
 末 秋乃秋のゆけの浦は舟や一十月もや鮎は鮎ゆらん
 三體 鮎 羨 尊 方 鮎 魚 肥 蓼 正 紅

一 鮎 志賀 西川
 末 沖へ行くにゆき今や妹よあふまのれふ藻伏東鮎

新 魚 一 鱈
いしとをかりこし豊田鮎つこ焼をふ中此玉章
たさる寸水口をやく干池のさゆる鮎子其数もさるれぬ
所謂視車轍中有鮎魚

一 鯉
宇治川 勝万田池 杜内里 湊舟 玉也

古六
行水乃しるゆるこひの原き細のひと角とつじこふ
流川より流るる原鯉とよ世もいせは長い川ま
水舟にうたひきふ家いけ鯉の今ま川及せりあせや
ま本
三志まてこひもさひうをともかこやの池まにさるれぬ
日機 鯉魚升龍門變成龍

一 鯨
批海 難波文 大舟 荒塚 玉藻 八隅志 不若

藻塚
集考
潮吹くしらのいきとる中るる沖よりしりゆこの中
々しらと原かたは海の底まても君とにままを波ゆ
三體 鯨 吞 洗 鉢 水 犀 觸 點 燈 船

一 鮑
岩根 洞 夜 蟹
魚は海の中を泳いでくるとよありいまのつこさやん
いせれをまの朝を中まにかつこさ鮑の貝乃片ありひし

一 貝類
之 溪 住 江 奈 吉 海 伊 勢 松 山 由 良 湊 雞 波 不 停
和ら浦二見 石川 大波 長湊 荒塚

松山の松乃浦の勢吹よせをいふてゆりむ放玉まれりい
後には今又またもきえ玉と成ぬん難波の寺の人とすれ貝

虫之部

一 龜

大井川 立田川 宇治
 百歳ハ龜乃上ニ居山多レテ千代をまじひよカシ毛衣
 川龜も今方代多法をば彼の庭まで寸ころわさし
 見しハ海ハ志了ぬ浪乃に任つぬれ若きも君も居え
 笑了れ宿まきをぬよらつたさく海ノ正あふ池あり
 ありつたみよ〜川の龜あはてはの海木にあつた
 千歳之龜浮蓮葉之上 龜巢蓮 抱朴子

一 守宮

ありつた山下あり秋の夕ハむまよふよつて下さす

神垣やいのち多おそふれと井ちれ下たやえゆ〜

一 海老

海鏡 蟹 烏 腹 水母 蝦 為目
 今ハ海世成うもに正老及ひの藤前の下にかまう
 人の及いそひよとせとららにみたるまに十九なる〜
 世の人ハ海乃翁といふめれとまゝとてしすめた〜

一 蟹

横ろ〜不草乃れかにの雪もあてあをきけおもゑか〜
 蟹 蟹酒盃 持蟹螯 持酒盃足樂

虫

一蜘蛛

七夕中分事垣あめ東や軒女帯を交た秋蛛
色竹 忍草 柳琴 能梅棹娘を妻弱鳴神
を等

於を

秋風も吹ちやううい宿のあつかくもはるるもはるる

今糸

山うたの糸引り糸をむらにとも織中入声うきこわ

初古

さうたのくまの糸糸世うけつ流ぬととて玉洋鳴娘

初古

筈かよのうにまうくもあやこまうに宿にを寄世うらん

初六

片岸にあぬ朝をの候もか糸流るれ糸世うたの宿

末

うし山一朝をたか糸流るたのうも安ふ家作う邪

三體

荒簷 數蝶 懸蛛 網 空屋 孤螢 入 燕巢

口核

蜘蛛集而百事吉

一蝙蝠

扇ノトニスレハヌリ

末

人もなくも素うらん鳴まうはけかほれも君を為る

於玉

かうりわいぬも戸うぬ古寺乃川糸もなくもはるる

千歳 嵐化 白蝙蝠

一藤は住虫

鳴音声ムスハ秋ナリ

玉吟

鳴酒よめしほりる藤の海まよ住虫や糸牙あるる

初六

浦よよる玉もまき糸糸うた糸と糸糸と向人もは

於を

人を扱うもみつるう糸糸ま糸糸もよ住虫の糸糸

一蝸牛

牛乃子

家集

家集 家集 於玉 何の難波のかんつあつ乃画あつと糸糸

口 虫と出ぬるる向一かつち下をゆふるもわらぬ世に
 岩 蛛網鎖硯蝸盡梁 田横蝸成字
 莊子 蝸牛角上爭何事

一白魚 衣魚 紙魚 青文 塵
 ふうふうおちる文も月日空しくあつたをきく物とをなほ

一諸虫 於を 虫と揺る火と下中ころあつたをきく物とをなほ

於六 木より世 ありー世このむらう木より虫もあつたの宿へ
 桑 木とをい ころりともう木とをむむーちんて原きんげを
 虫 野生 こすふとをふみやまの音とを鳴秋の虫の音よ
 後撰 忘打虫 火の定打虫の羽音よの秋の虫の音よ
 菱家 秋虫 秋乃ゆま玉とかんふ白家ハなく秋虫のなまら
 鎌古 川中ハ声もきくひんて蝶の羽乃くと落きも苦一
 きた

鳥之部

一羽 菅宇治 奥海 八井川 枝崎 淀玉 江桂 三河江

夏見川 志々川 彦原 見梅津川 妹背山 夏川
山 沢川 井杭 友虫 急雨 岩

素 山家 素
白溪 山 志々川 彦原 見梅津川 妹背山 夏川
秋風 山 志々川 彦原 見梅津川 妹背山 夏川
久々 山 志々川 彦原 見梅津川 妹背山 夏川

一羽 角田川 千崎 二井後 和留崎 志々川 鳴海 悟
古里

後古 吹風ものときき花の秋も治はる世乃とやとハハ
素 舟とひらなまよとまりのよきあふ

一 旭 秋と吹 まりさく 古畑 秋谷 陰 檜 系 固へ 志々川 雨
古木 八日 志々川 麻 柳 柿 晴 山 望 竹林 松

山 村 芝 古官 香

素 小夜更 子 吹 山 秋風 山 志々川 彦原 見梅津川 妹背山 夏川
毛 け 系 八幡 乃 山 志々川 彦原 見梅津川 妹背山 夏川
高樹 有 巢 鳩 笑 拙 空 壙 元 穴 崩 蕪 貪

一 鷲 築波 二村 山 忍 山 夷 崎 崎 岬 中 出 羽

鳥 親と 志々川 彦原 見梅津川 妹背山 夏川
信 山 本 志々川 彦原 見梅津川 妹背山 夏川

一 雀

鳥羽宮と小倉野狩後八田園行雪川田

むしつ原田中乃宮のいさ雀ふりひたきたらしくちり
打ちあふ人侍宿のくれ赤よりくもる鳥村雀ふ
新六 高生一羽のめまけはえれとまめかたなまを成なり
ま未 父うたえ色乃竹のむすすめ迄とも交したのこり
集未考 妻のゆよむめいなるをたふ原と戸庭の内よ色笑け
天武天皇の時築家ヨリ赤キ雀ヲ奉ル則年号朱雀

一 鶺鴒

高砂 赤花野 裾中花 兼 鹿月 揚尾上 衣打

後古 野の鳥を山をたは送様あら素くも乃て取又の

新千 新古

山を八ほろくし鳴きけと父くそ思母くころ思
そたふの神の鏡りけとくを山をもちりや鳴らん
はくもこの山をたは尾乃ま可かころけし出原秋乃衣月

一 鶺鴒

高野 山望 古官 物喋 松元 菖子宿

山深く中く女と成よりり小ね実くるのぬくころ乃色
物おもへ木もに杜にふくろの昔きりとそよふそ
古詩 林 暗 鶺鴒 啼 鬼 庭 荒 雀 啼 蛇

一 鶺鴒

冬山 菖子 異竹 菖原 朝露 露き新

玉吟 夫木 山望八塔の志く人あれて雪降よりり合井細る
風といこも田中乃群の山うられ塔ののこは遊あり鳴

□ 雨ふたかひの志くうほぬけり啼くひま乃山本

一 鷄

立田逢坂 原別 滝跡 林園屋 云々 神怪 鷄
まつとくういとをかーこー花山と云りしうんをたふま

時一もあれをう啼を家朝々や木の丸を洞の明の
園乃すのし付をうつれなく了麻のちあふ原屋くく山
清見くいうこく舟も園のす代めるとるれ音や知ん

鷄 既 帝 鷲 未 出
鷄 既 帝 鷲 未 出
鷄 既 帝 鷲 未 出

鷄 人 曉 唱 色 驚 明 王 之 眠
鷄 人 曉 唱 色 驚 明 王 之 眠
鷄 人 曉 唱 色 驚 明 王 之 眠

此の民ハをれ司も笑てて下まれとおとろく五更乃三交
このつりい鷄人ハ鷄人ハときととろく常を人なる

岩 鵲 傳 吉 詔 安 得 閑 鷄 催 晨 興 不 敢 卧

一 仙法僧

松玉 松尾 高野 我画 滋林
松玉 松尾 高野 我画 滋林
松玉 松尾 高野 我画 滋林

後の世もたのくろきをちれやこのたう成色に何と
ま木 なる乃ちもこの所法とき子くを山乃唐に仙法僧を

性靈集 寒林 独座 草堂 曉 三 室 之 色 聞 一 鳥
性靈集 寒林 独座 草堂 曉 三 室 之 色 聞 一 鳥
性靈集 寒林 独座 草堂 曉 三 室 之 色 聞 一 鳥

一 水 乞 乞 夏 日 谷 負 山 望
一 水 乞 乞 夏 日 谷 負 山 望
一 水 乞 乞 夏 日 谷 負 山 望

ま本 君とまつとくをまろ奥山は水乞乞をれらるるふて
山乃井のじとまろや濁るらん水乞乞をのあぬまろハ

一木免 行山 岸庵 松風

山々勢又橋のそくいちたう一は耳つてもまやをく
ま 夏川の山はくはみつく世のうに中きうとう思ふ

一又考 井杭 柳 魚

井杭 といふ寸とくくくやせんくうらふみ枝のあくら
莊子曰 在上為鳥食 在下為蟻食

一物 稻荷 常磐社 大井川 音音川 熊野 枚村社

井杭 多のお考 物 考 考
月は鳴るやもく寸の音立り社入石り月を行

吹風よ雲を迷ふ山辺は月夜がすい色も
月寒く山はこま糸の電光にうらけり寸の杖く
にくうわー娘り寸も娘ーきき 杖ゆる杖乃五実の

一火焼る

百憂又柳定めよ火くた多沙り舎れも庭よ中し
思ひの葉れく山望に杉寄りとやいれをさく

一勢 天河原

らぬに世のそりなき思ふにぬえ鳴る原暖乃
雨又水といぬれ下終衣物思ふ宿にぬえ色一川

一 諸鳥

松川 かたが 交り川にうらり山乃推栄にかき鳴る
 末 ね 白山乃松のこまよかくらへやまき
 山家 ひ 壺せまよと父さくかと思ひゆ柳のめま
 玉吟 まうき 古より杜の梢よりけりあすかちり
 末 ひ むれり飛雲ひるの水をに校めりも
 口 うら まの白乃松葉にかま山里に物あり
 口 うら みちの松そと淡き色呼子る鳴る
 具行 まひ 志まはる落く候はるまき
 末 ね 山木の雪ふるまき
 口 つる 是も冬まき物そ急な
 口 あま ありれとせいとや云んまの味を

口 は 朝まき
 口 は 山さき
 大系 ま 山吹を火
 具行 まひ 山吹を火
 口 あま 鶴胡とよ
 口 あま 松の浪乃下る

Handwritten signature or mark at the bottom of the left page.

獸之部

一 駱

山より石をむくものころけきたに川なるも今始り
たつのもをわれを求めんあまによし
車如流水馬如龍

一 免

伊勢山木立も又まをなすれ雲のうらたは
山様きほひあふ人好よ才とさるはうかり
車前驥病駕馳逸 架上鷹鳥田鳥雀高

一 驛

梨原次广七後かこ後膳大政
因能法政酒

采

采松枝女一使教思

泪もまをこる宿のころあれと津のつるは歩ふれ
まをう山しまやけははし同哉一并白まあれぬ古
を改の園乃を以て出た又よ張傳はのまきき
東の不破の園を原鈴中ましまは振と思はる
去の塚のしまやけと侍倦一君心ましく成そ
旅衣笈髪髪めぬぬんあひひりましまやけ
渾舟火影寒焼浪 駅路鈴声夜過山

一 秣

彼園並去の小草あせみ山吹
こま草よ刈のころけいぬ百合の心ま
まや人よま

獸

愚者 鹿の伏う尻毛のいりよ志ほろろけ月の桂乃陰を頼りて
まよふ月の光乃白うらに香にちゆふも忘れ
る言 秋のや乃尾の浪とえまき免と驚かす人
集考 まき印の小萩くるとと床中一親きもあぬ高踏八耳
杉鶏竹免トヤリ

一牛

由波崎 越 築 小車 うまひ子 山氷 山室 嚙牛
総角 田中 畔 牧

於 冬まつてもこころは物ある牛のよれやとあつて比を
終 ころころ子とあつて牛の角をのきとあるらるるを
口 いたる人々の田のころり牛は横をもちに時世を
来 したるは残り耕をかりたのころりと思も力をたよを

口口口

いりよとよあつての芝を飲もゆい牛とあつた編
ゆまうらにゆらちと方ゆの牛は子あやち一ちり連た別家
耳洗人もなれと山川は水う牛洗いきもかろるる

一猪

名寄の山 篠系 畑山 尾上 萩 葎 雪 掃衣
高七 山陰 谷戸 古飲

於 其のゆのす秋のゆ花おとるん伏松の床よ枕を
玉吟 いよとん外おもきぬ浪の上もあま乃かちもに
来 空を倦り伏お乃差やれぬぬんかちもの床よ露を後ちわ

一熊

とせ山 立み 荒中 山伏 谷陰 奥山 捨身 芸岩山
白非熊

一 梶 七夕 玉札 斬る

素木 賀 梶の玉に八百万代と言付て形ふ祈りむも君うまひ
風雅 目よたけぬ垣のよ茂ふ梶乃素も乃婦人の色いさる

一 樟 依保 掃 大川の辺 志の屋 舩 渡 舎 彦 夢 妹

素 並立ふくぬ木くるとに約とめし仲はう原よ志り涼ま

一 梶 花 木幡山 忍山 耳堂山 若布山 山吹 萩 雪 彦 彦

風雅 口ありの父よ素りく川ちも十女院をき若う雨然り
口ありの父よ素りく川ちも十女院をき若う雨然り
口ありの父よ素りく川ちも十女院をき若う雨然り

一 粉 政 辺 奥山 時雨 雪 み 子 子

古六 岩やうは孫よよむら乃木海とるわ昔の人に
吾妹子らりも浦の粉乃本名世にあわとる人

一 栢 三 室 山 家 野 志 ぬ 冊

新六 花さけと人もまよめぬかえの末は徒よの身は成に
塚の上は栢と栢よの身まき侍人と雙妹か

一 胡桃 山 々

新六 其山乃志けとかれのみめくもみかひ
友山の山を志に志けきり

一 莫吟菜 和歌浦 川津浦 志賀 二宮 北城 養みき 伊勢

妹

終 洗は浪津の京、名乃下と木丸をよ、うづら仲
末 碓の浦波の玉も、の沖も、葉をこ、音に、うらほ、き、か
口 ちの、下、うと、あ、ま、れ、ん、ら、め、に、刈、き、う、あ、ら、の、浦、ま、よ、い、
と、ま、れ、ぬ

一 日蔭菜 狐をくせ 天河 雪残 垣根 官人 ますきの後

終 早なき玉田の沖への玉日、うけか、え、や、ま、あ、ら、あ、ら、成、人
末 あり、う、ら、日、影、の、蘊、千、代、う、け、し、ま、ま、の、ま、も、れ、ん、比、る、れ

一 実蘊 ちの 出立 田入 山 谷上 在坂 敷の杜 采

玉吟 初めの山々の越来さ、のう、う、急、整、ふ、れ、秋、風、う、さ、く

一 玉蘊 あよひ 八十氏人

末 玉かつ、ち、ま、ま、を、く、く、入、江、山、く、お、と、う、け、く、あ、ら、あ、ら、
係 けつ、ら、こ、こ、心、も、あ、ら、く、玉、かつ、く、ま、向、の、神、と、成、り、姥、き

一 余古草 筑根 安信那 芦垣

終 いく、う、う、一、垣、の、に、せ、ら、に、こ、草、の、ま、く、と、の、妹、よ、き、え、ん

一 藍 州ハ元 志の海 山花

末 菊入も、この、れ、の、深、く、あ、ら、う、く、を、く、紅、の、花、あ、ら、あ、ら、花

其草は去けしきり一系草をいふとをきくけけり

一山橋秋六消磁雪 時香 卯月

秋六 消磁雪 山たらしの岩の才の志深秋をいふも所
ま木 岩乃を山橋のけりて一庭ま一玉め系座のや下木

一溪上 和文浦 千智 時香

ま木 和文浦のて留中待竹の海や神代の子も時香
ま木 三徳中其の溪上をて咲萱をて父入心てす
ま木 千智も素うた池ぬ三徳中其の溪上をて父入心てす

一木賊 信濃

新勅 之くさ刈きとのあさきぬ神ぬいみかぬ家も
ま木 木賊り信も系山の木乃よりたふれ出る秋の夜乃月

一薦秋六堀江 美豆中 玉江 三徳 鴨 岩垣 落蒲 時香

秋六 堀江 美豆中 玉江 三徳 鴨 岩垣 落蒲 時香
ま木 ちまに ちまに 沃約 月 螢 蛙 下立 氏 みる

ま木 此も花の影の溪乃ううの舟跡きも竹長無さる
山家 沼水は流るるま山ものうらぬを咲やて一舟も杜あふ
ま木 難波は昔もまて毛も白髪も角の心遊は元社元とらぬ
川 新橋入江乃ま花末をて立みと落雪は昔も定て
川 川にんて角紐よりま草をて一旗の雲をる池乃ま花
川 山々の伏や入まも編目よりま入るる

瀛海 萬蟻戰來一春日 五星明聚夜堂深

一横雲 未松山 爰浮橋 二村山 去々記 小教中山 花一有明

時多 介山 照射 改雪

形勅撰 月あしう 兼山 物多山 乃たによて 雪も原雪の明あ

山いめの 彦八 神や白うす 十花より川ろふ 横雲の明あ

河上やまの 横くも 原雪みと 十浪より 小教山 漢の明あ

可よれ 走花の 尾上六の 神七 松ちりり 記 横雲の明あ

ほのしとを乃よて 雪し明るめ 七 橋よ 去々 十より 記 花の山

一朝 万 初雪 日新 釣舟 釣笠 釣竿
朝さるれ 妹り子 まましく かみ 走に 下略

素 朝のつたさふひから けは 伴釣山を けを 定んて 八 走に 下略

あに 走に 下略 出つて 見れ 走に 下略 神の 決干の ぼり 走に 下略

集業考 走に 下略 起つて 見れ 走に 下略 神の 決干の ぼり 走に 下略

はや 走に 下略 の 走に 下略 村中 走に 下略 七 田を 入て 川 音 鳴る

走に 下略 旅人 今や 走に 下略 人ひり 乃山 のい 走に 下略 走に 下略

一 芙蓉 散

秋涼 走に 下略 たさうれ 時 走に 下略 散を 走に 下略 白く 走に 下略 名の 走に 下略 心し 走に 下略 走に 下略

古六 走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略

一 天人 走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略

走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略 走に 下略

素
しめ子の天乃羽ひも引連てしつも吹井の浦におるは
かろつていつか津らんを衣の後まきまふ石山乃ち
天は人今やとて下つた山よりみまき花はくすまふ

一鳴神

暮巻向信果さ向音羽橋川上ひき灘次
松立山夕立青雨親思並に風たて人下音
長月晴雨同蚊色淡後思人といひまふ

言市五子武勇國戦は達と信事とよりけ

百二

こころ成あよりい多いとのふ鼓の色はいつらと字を

拾七

鳴神の志よりうこけしそも雷も名もくもくもあふ

六六

伏入のりわらうの神あれやまゐるものもあふ

錦織段

閑人倚柱笑雷公 鼻雷 蚊雷 法雷

東坡一夕雷真鏡刻碑

日創腸如轉雷

一虹新義之雨跡夕々合海氣川上吹中冬山室二金山居市

凡雅

虹乃立跡より雨さ情ゆくぬれとのねとよめる

ま本

何れかたにそとそへ後思らしてと房くく家着誠山

門

おまれ虹立秋の山極深よりとるかつて死山

詠詠

山腰帰厂斜牽帶 水面新虹未展巾

二月虹初見萍初生

一嵐

初嵐之室橋 雲暖待雪杖を發木君松晚境
草や良木戸板葎尾花拂衣虫葉
山ありのるぬと思ふたふなをたてつとく軒の松毛

玉深

凡雅
三きりあゝいさゝか初乃深の志川に流るゆふれを
山原と木々記流のこま急うたきんくも海を嵐
窓よりよ月かゝくも是川のあゝ吹ぬ若とる思
紅の霞す糸八雨と霞をうみよのあゝ松に吹ち
花を草の上は吹りけあゝ改おぬ山くす素
ま木

一雨

三橋り清 依中後 三望山 雲上山 梅山 ちほよの小や
旅中宿 蛙 滝 旭 田植 松風 木味 寒き心
雨ちよの甲よたさへし時を暮れとさしてこの後
万 万の星も核さぬよなる夕風は暮れ色かつ中への旅人
玉味 ぬるうと立休へん松陰や風のきりさるる
口 ちよ又ぬきにあんや暮の夜乃月も花の地を
錢千

風雅
大まよあまひくおほの心はまらふ雨を
山原 初花のひけそし若梢をたうそく風のこゝろ成れ
協川 雨風は荒のこ場 京野寺よの灯不にはは家老よ

一祈雨

法師かく夜衣 神と鏡を 歌 貴船
祈千 雨のめくみよか、家か、衣立居よ代をねりる
祈千 雨のめくみよか、家か、衣立居よ代をねりる
祈千 雨のめくみよか、家か、衣立居よ代をねりる
皇極天皇河上三行幸一四方ヲ舞ミ多ク雷雨五日世間ヨシ

一惠雨

二見 畠田 水蓮 山 笠取山 宇治 蓑の 和田 笠松 玉川
かゝの社 彦州 九月 蛸 鶴 桂 丁 芦 萱 軒
菅蒲 花地 飯房 桐 楠 柳 中 分 持 原 玉 笋

半松系蟬虫抱 友萩中錦葵萩稻事
 旭吹堂早合朝負卯花翠凉
 後撰 吉野川中村西隊ゆん岩万に滝つとく中
 玉柴 津守月嵐は交るむさめははてはたてな木柴の
 風雅 芳かふ介面の小田乃村西はさしはてし早苗丸之
 玉吟 ひるまよ急橋乃夜と紅みそるうまにかりるこく
 愚草 う心舟村るる原無火は守方の甲兵斬り争ふ
 新六 老雨は考とけりし原東空のみま下に流る水の快

一 岩屋 常盤山入峰清見元了 吉野色板等若松
 洞雨苔杖の山伏若抱の墨澤神月也
 晴ぬ山人若抱世背 枋木若居若常 若居

新六 谷原よ岩た立る若居ららつて若居不協ある若居
 末 右よ急、うれ若や又復巻の若居浪とそきぬん
 万 右ハ落く久若の口子うま、若居之保一若や、若居と
 おぬん

一 巖 龜山君代し女神 碁友松海松 枋抱薪
 苔庭 松滝 髪 枋子
 新撰 万代の秋を待つ、鳴後不若尾は松た松叶の色
 玉柴 相おもぬ人乃心ハ山若れや若居よらたてうこらぬん
 方子 二つた死のうて又風乃立ぬ、若居おもは暖若の法
 末 若居れは行かん汝の持衣若尾乃中に枋重の若れ

一 卷 三態也 若崎

金葉 石つとあふる物と君よ又とくまのきと思ふ身
ま木 友山八不誤たごうまき一八八岩の身は惜いりや

一水柏 玉柏 岩柏 難波 宇治川 入江 管

ま木 乙汝也川あゆみの里に妹を並り岩大柏と論ちつる
新葉 吉野川若者かにも笑ふ下たなわ保き一乃山ふき
新叶 神風や山もまき川の玉柏志つむとく川とを上り果らん

一土砂 吹上 難波 志の海 富吉川 紀海 次 川 臨

為雪 和らつと 零 君代 一 箇 萬 金 甲
庭女に松 神林 舞 扇 宮 百 本 千 得
足る友よめつしきりぬ白妙のま砂よ立る幸崎の松

風雅 草むしれ申の色よふとれ砂つとま砂のまきり日成ぬ

堀川 流竹川田にまきりく螢とくま砂よ海に風重くとくま
古今 承玄のまきりもほきり一わ下る海の浪のま砂の浪

一土砂石 倉山 長柳 溪

ま木 神風やみもまきり川のまきり石君の代あて志と成へき
川 七兵衛海に散るまきりくまきりくまきり物と思はれ
川 沖は風吹よの浪の山に散る君よのまきり散る散る

一水調 浪頭 難波 堀江 二 万 里 竹 田 若 野 志 賀 多 色 坂

老曾杜 くさくさ 民司 君代 新葉 肩 於 車
夜玉 馬 氷室 守

新平 治承元年代乃真とよ原氷奥と入家今より子孫あり
真きあてふ千舟も備出より乃泊汐もかまひぬ
六帖 けり形も七八乃の酒め海山うけてしるめを以てさき

一政

田子浦 百友 萩戸 年芳 蒲芦
新六 彩六 増鏡 夫本
いそつらの銅まつりてと志けれと代は波ぬ波の
二が正めん穿一も水山建に朝政かこころ下
異作の世も治し家まつりるも学をも海況の
わをこめ「朝政引て今もほとけのたふかこころ

一元服

毎つるそみ衣 あけのちいふ云榮 正一 中葉の笑
流外 良榮

堀川 うまの子うそをらの髪をたえつまてめいし(訓せり)ち
けり此の神りけりいとしらあふし君は位(山)の
年中 君代乃翁キと翁をよりい人神元結よじし(山)の

一女結

形見
後乃花打てかをてふしうたさるのゆものあやさ
後乃撰 ちゆいの中あ原はのまうらにさるね限、知人う素き
けり ちゆいひふあゆいもあふ下ぬ色(兼)の兼(と)見(た)
堀川 ひとかむのあをさくく女希をいあをさくくあはし思
ま本 老ぬたえより元結よ居参のさくも千年と髪(山)の

一白髪鏡

吾昔恋 古ま一 夜 三世仏 徳の君まつよ

貞今 落滝津水の水上年つりて老ふくくしつ星き帯を
後衣 卯衣いさききととをえゆかを後う垣の八年窓に
素木 年冬う原志尾の上に雪降り老ふくくしつ星き帯を
松を かきうていさきうにまうし梅のむ今いづれとぬんとす

一髪

あまのうらみ 髪 髪 髪 髪 髪 髪 髪 髪 髪 髪
葵山 羨 蓋 し女子 井筒 縮妻 吾妹子 女仰也
鼠子 妹 物 怪 物 思 柳 海 玉 玉 掉 非 石 鏡
根もいさく岩不りよまじ正首の髪をおふふ心社と
振ふ原いさきのを乃所もこれとくたのむるくこの昔は

一管絃

花賀 月下 歌 山階 酒 は 山事 夜の舟 玉出

九重 舞池舟 七夕

天乃原定えとあまの神代下今も絶えぬ糸竹の色
立ゆらゆら乃夜の神代糸竹の色も月沈まらば
神風やもよま川乃さ浪の色をあまの糸竹の色
終歳不用絲竹也 杜鵑啼血猿哀鳴

一琴

備山を越坂 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山
や井を酒 山 水 月 笛 七夕 蝉 爆 厂 玉 章
柳 栞 夜 世 六 虫 松 虫 菊 朝 倉 色 宮 屏 風
軒 平 山 向 堂 相 思 友 流 水 馬 上 花 々 夜 夜
た け 乃 人 侍 庚 申
その月日とうとう
時あぬる雷とあすの雷

海

鬼神の身とあうる尾くけてあめさひ
六月十日の夜雪今もあつてくたつたあめ
糸の重くはる山を吹く音は世とともく
松の音とてくにきくふ家秋風の清の糸とてきく
引琴の糸のうしつけは月影と秋の雪ととてきく
緑琴 蛛細 遍 絃 絶 不 成 聲

一四緒 雪下水 入江月 天人兼
玉吟 乃とゆつる君よいれし四乃のよもきもさる名をさる上ぬ
乃後古 乃池乃半れ月を新うらも 振はる増る乃四乃絃の声
琵琶行 大絃嘈々如急雨 小絃切々如私語

一笛 三枚也 任江琴 松風隣 窓風 爆 甍子 神系
乃後古 乃池乃半れ月を新うらも 振はる増る乃四乃絃の声
琵琶行 大絃嘈々如急雨 小絃切々如私語
千々 乃の音もほのうにあけぬ後乃男う瓜木の乃やきほの
乃後古 乃池乃半れ月を新うらも 振はる増る乃四乃絃の声
琵琶行 大絃嘈々如急雨 小絃切々如私語
坊川 舟とむる入江乃月乃新とて乃笛の音寐 振はる増る乃四乃絃の声
末 吹まらふ池の風と乃笛の心にまよふ人乃神うらふ乃
乃後古 乃池乃半れ月を新うらも 振はる増る乃四乃絃の声
琵琶行 大絃嘈々如急雨 小絃切々如私語
陰詠 蕭索村風吹笛处 荒涼隣月擣衣裡

一詩 大原 拖花月酒琴兼 歌在 屏風 夜雪
上月 月も今おほく乃清水をいさるる面からと原世も焦
愚家 秋よりぬまのえんより父のるまよめうも左去詩

一舞 吉野 賀茂祭 中納言 中納言 神承 琴 笛
百枝 階 花 笑 拖 蝶 鳥 夜 衣 衣 葉 花 籠 籠
及 世 之 思

名宗 男 出らるるかすくすまひおほく月夜の新とすいぬ
協川 九重より霞葉にし女子の立まらうて乃霞うとす原
若首 流人の立居座のさうぶに光えそよ千代乃る川春

一諷 難波江 入江 蓮舟人 詩 蟹舟舟 舞 娘 琴 笛

酒 治世 神承 化人 茶後 樵夫 控女 主 能 田 和
住者の家の娘 神代

愚家 山人乃て云て道不たす錦とてくもこの紅糸
ま未 白雲の代を候は舟なりた乃りき声よこす舟人
口 山望ハ秋と和風琴志よ小神田川志川ハ千代風よこ

一碁 筑紫 家 中山 宿 仙 松 虫 搦 歌 詩 舟 夜 暎 灯
夜去より上席

春 古里 公 乃 てもゆき寸弁の柄の柄一亦う新く下急
西門 中納言 葉をけきめい
原氏 よみこ乃 堀のよ白ふ葉をて心のまにわつてま

又才山く成りけきめりし

口 咳とてしに安ぬらたあつてまを居るは浪も

其者打の抱ひるけきめりしはめ希むとがし

糸

め希む打まかふ家しとあむしうけまのよめ

夕とる切の葉のへまよとめりの中りま

はるまはまらうおらうあぬまゆり

あつにましまの申奏の心と海とて相別く

瀛奎

其器罷 嫌 無 月 眠 暹 聽 尽 砧

増後

奏の賄物の錢にむる者よとのぬかけきめりしとせよと
と後作とせし

一富

世乃とて多岩とて山は納並て万代まるときみまはしこ

口

まのり福とおまこの人乃集る富とてぬらたのり

一尤比

清見吹飯 次平明云 松山築家梅いらる此世

ちきき存命 八十の 釣舟 清衣 墨漆 神はる舟

孝花 山奥 能 東西 郡 鏡 南海 周公 息

万

永宿のさる橋多しうららるるらん人乃

山家

浅きやうららるるのむらひもわかるとも世も

野古

山まゝ家あ身に うれは象浮や黄の管におま

一市

誘 廣 安信 布 ぬ 立 田 住 吉 か 保 う ら ぬ 相 摸 や 長

毛 多 久 余 勢 大 庭 玉 章 早 行 底 炭 車 巡 多 世 親

川 舟 登 原 時 め ぐ の 内 采 的 酒 花 菊 梅

於玉 毛ろくし人よんをわ幸時の陣より志がたきま
夫木 舟をとりてくつつ對するまをぬれ羅の山をえん
年中 へりりり傳へしきけの色入和衣土中たきり
新古 おもほむ神は溪のさくぬをら所 舟のよりり
吉野 築修けり山土より山開て来りて吉野築修とをふ
砂原寺分る八重土にえりき后泊洲の利せにより形あり
成路も時台の刻入津と四筆あり十種の寶物を泊洲より

一 筑紫次 赤石 久米岡 松浦 宇佐 渡 沖崎 志 大辻

於玉 綿舟能 旅牛 炭津心 玉葛心
於玉 風吹て藤津のより打ちかき思ひ方にいれころハカ節
末 舟の程よりを舟よま来にけりと敬る舟のなる口香

於玉 舟のちりき父乃杜ときうをた敬の友乃心ら新
新撰 友舟多しうも、七を漕おいの川一泊よりき新をう

一心 不叶 舟を氣 企救池 松浦 歳著

於玉 木の月ちり度土舟のうに新おも心つく月の月をえり
狭衣 歎候度ぬ板入るに似るる心つるなる卵五月
於玉 皆人入心つるよおや此浦をかきそとて吉野久米岡書
袋茶 船板に東路と舟中へ心けりて若よ社を公家

一 東 佐東中山 築波 麻崎 武彦 白川 逢坂 不破 約

於山 梅 臥 冬 羊 八 山 路 忘 水 中 原 藤 系 羊 枕
月 板 板 茨 大 辻 旅 任 不 求 和 寺 浦 吉 師 山

於毛 東海の中ら八雲万とて来りありぬ故乃茲成るなり
續は撰 行とゆふ事とてや八雲海の尾流なりとを宿とらふめ
風雅 貴人として侍り東に乃智田の世とて音もさるなり
於玉 ありまら焼玉とていふ事の中にもいふ求食射事
は物名 東よりや一まられり人の子多古たて社物にいふ

一 歌詠 有乳山 旅人を方人 俾一 赤立松
俾子へきこの旅人侍候しとて此月よりあふ山あり
いそりありし乃雪の終るんまよつに河原の松を枝
續は撰 秋のくはよありし人侍りたる時なり
秋乃夜に一かも鳴り候りありし由よとて傳也とて

一 田舎

難波 山守男 蚊を火 芋垣 田舎 昔書
た辻 たりと四寸
いそきや民のいそなるもにつまやれとて首ぬる物
物一ハ守りすれま一年月は田舎をたれし人の色ハ
ま なるめりしとての形乃しもなれやありし下ありし

一 鄙

淡路 芸神 詠表 籠漢 たりと 冬書 新並や
あや田代 た辻 国司の貴君とて作 芋垣
天よりあひまは月をぬえれとていふ一級を解もあけ
橋のたはむりの神乃書にありいよとていふの中
天よりあひまは月をぬえれとていふ一級を解もあけ
新並 中

万 素 新吉

初学文のしるをてりて及才と云あり
後ら学乃從了志了所、上三三 漕舟する舟めりりも都の瑞
学の本は打白のし、上三三 志まんも志りいそぬ位より
けり源氏の山子父寄位よすことあり学又よ心りけり

一 夕習 小舟奥 親まをりり子 琴 物恒息 歌 雅 隆 津 後 香 山
源氏 風雅 何となく現まむり子習人よりなるにありいちるる〇ス

一 草紙 雷中 依然 歌人 慕 石山 昔思
は撰 人乃草紙かセらるるに 愛々
柞山路のありし風といふ多る文の字と書りしつじ原

古き草紙の父をたむきうれ 柞山路の昔思をかき捨る

一 六刀 比叟中山 伴 坊 崎 塚 旅人 武士 君 若 若 近 衛
右六 白〇〇の同費乃去力と云はれしなり其歌と云はれし
刀もつまらるる水物と云人のいふ成りたるのみま
いふおと恩(不物と云力と云かまりの田井に斬る掃
山作と云のまきよまき〇のりも、ハ今しあるる人

一 劔 山若 利 劔 昂 昇 秋 若 北 風 布 袋 若 水 若 世 山
けりきと力若のおけりも承る若よありし年のは
虎よ山若屋と云て書し又抄きてんつるは力めり
心よとめり女きいりり上三三 ありやと云はれりもつるき

一支類

池草蒲 如意梯

古今

まけまゝの山とくさく成ぬれはけく枝のま先つらぬ糸
るまゝ心より嘆物思の枝の枝とやはくつまよつを

一櫛

志加の籠 其屋 蹴壇焼 音響子 くらひ子婦人別
夕古 形又 其の

流くまゆ人まきとや原と

は撰

まにえりゆもあつすみつとく心の中そくわう

古六

水の流るる心とおもへと常れ枝のくけのくはく

素木

極つる千里の国よばぬまきほきよくもま苗た

一鞠

治世春松栢 柳小弓 釣竿 宮雨 夕暮 双酒

素木

又神仗 秋ま 白川宿 其砂 其切 猫

係氏

花の枝にかげく粒をまりの音乃をまの枝に雨淋之
余河よえくあぬ歎はまの枝をまの枝に花は夕陰

一金

陸奥 皇代 柳 菊 山吹 螢 玄針 玉照 君心

月清

以んせまのちのたつと成物ハ仏とみりくこの心より

素木

白くのと今れはまの嘆まふ玉のうとまの枝を有る原

口

又原友にめつとまの枝を有る原の心はまの枝を

一寶

酒弓 子玉 金佛 女

素木

やまにむゆりの玉とまの枝を有る原の心はまの枝を

□ 為後のいさよふいさよふ若君の寢の位かきくらんくを
は撰 女成かゝるにそよめりか
とをいふはくまよる命 ます後人乃室とるる悲き

一 屏風 百姿 例ちぬ 空焼 人侍围 音をぬ 釣を
いさね 琴山 唐衣 賀 地獄繪
神宵月をいふはゆふの氣乃秋果よはとるもる
出ろとてんさるゆーくま唐衣たるるをさすはぬうゆ
た下ろく屏風乃浦の雲唐衣よにを坂の園とてし
屏風よや心をたつ 因んは者くくをり 呪いさるぬ
冬のをくあやきまるとに屏風けら 春の始玉成
荊荷くくくんとそ 晴のころ

朗詠 山似屏風江似簾 叮 船来往月明中
橋嘆をいさる乃方も九十賀屏風のいさると
はる羽院あそくうまあり

一 服皂 服皂杖トモ
けうくと押つたまふ万代は花のいさると心を川くた

一 薰 七夕玉堂門 中 林し女 蓮 兼 菖 菖
志をいへまう原くよは此物はくはとす
志のま原浅乃乃山もをゆをいへ不二の烟乃いさる
白ひらるるをいさるものとゆはと梅のくをり
にやいさる花をいさるのを焼まう菖の火とやあは

一 雛ひなのた 祇 屏風 繪

そのいふもおもひなりとを思ふ社に成ぬ
口 風を神のあつと松を以て成るおもて成ぬ

一 小巻 衣打 鈴麻 築波 初瀬 山里 柘 瓜木

又しもれと民もさぬき永日の夢もあぬ山栲家
夫木 山守を初瀬の友と志川をまゝに教ふもあぬ
狭衣 谷守を立とてまたいふもあぬ思ふ人の朽てやぬ家

一 洞布 玉川 吉野 宇治 牛野 向川 佐保 三保 玉川

川多の池 大瀬山月光

後千 朝日山神の石の影をいふと布をたのむらうか
妻木 枝乃影ささくしつらてはくれにえぬ油をさかすむら

一 帯 衣 徳中山 細谷川 藤崎 伊子 石 南風 山後 片衣

後千 時と衣花田の帯は仲あれやえらうかえれと池ぬ家
妻木 ぬ帯を初瀬を帯にすしつらてはくれにえぬ油をさかすむら
口 白帯の玉の帯もささくしつらてはくれにえぬ油をさかすむら
口 白帯の玉の帯もささくしつらてはくれにえぬ油をさかすむら

一 錦 立田 床裏 松子 小車 萩 吉里 秋山 蓼

風雅
陽川
玉吟
素

夕ぐれ思ふて下りて中をばあやにきりきり人のおもが
こころにありきれ細くけぬれとてちり物共の素
白川の園乃白蛇の角に一に月を吹く長いめい
花錦あふく久乃山様一じりぬを先回方志山う勢

一 玉産

至り 夏も め希也 梅 くら花 貝 海山 山 松葉
歳 餉 栗 行む

新勅
新撰
新六
百六

新くは新のさひと下りておほのたをふつとて
ゆきもいづもおん山様花あはれぬ家法ともうぬ
いとせんがのほた包りて妹もせん松うらう
友風のふ枝りつまたとてよ人のほたては

一 茶

素
口口

泰山とてこの山を流るる者 徳和 茶 萬南 桃実
万代とてめし居茶入茶とて人乃老をぬくちりよハハ
つらもいよかき茶あて西とて終のすうとハと
茶本まう仏のこころきりすとハおち居はみ茶ま
創晨阮肇天台山一茶と取まけ桃と丸食一里
神行仙女逢半并斗主婦と成り四里にゆえ七世
乃子孫にをて云

一 瓜木

小茶

行居 築波 小寺 大原 石上 吉中 谷上 岩橋 山屋
芳丸や庵 覓 花雪 栂 隈家 まま 曾 信
蕨ゆつら茶 山ちり 柗 松 笛 うき子
瓜木と居を山人のゆりてままうとてハあきハ日月

愚草 ふうたに打ねるに更一葉もたれ九重の内をき

一 麻衣 妹背山六田小波 波池 文成神 山賤 山望 松蔭彦

田子 燒燒 袋士 秋 鴉 鴉 こと比 槁 樞 倭人

神子 木賊刈

玉吟 空をぬれぬるやうにあさきさかきゆりて千鳥鳴ちり

ま木 かう打八中氏人の麻衣もぬれ小波のやまき乃花

藤垣 衣木の神衣をくあさきかたの山よあー吹きあり

一 求衣 山住扇 秋風 山伏 雪山 人も雪山 ぬれ日 ぬれ

ぬれ 山原く行ふのは衣もぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

ま木 何れいよあさき衣の求衣けいけいけいけいけいけいけい

一 糸 柳 滝 七夕 琴 盤 日 新 軒 写 蟻 通 古 事

糸 河内女乃の深の糸衣もぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

ま木 伊勢山あーも秋乃衣は吹き深の糸衣よりあさき

一 牙乃志乃衣 八重よりの代衣は若代は時若乃代よきり衣

山望の糸衣の若代ゆり心牙の白衣ぬり寸とま若よ

雪乃衣の糸衣をきりりとあさき若代も若代も梅の糸衣

糸衣の牙乃志乃衣をぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

之白二糸の若代は白衣あさきを流りり事

陰雪の糸衣を打きり、糸衣よりあさきぬれぬれ

は 撰

一 蓑

管狩人中分心鬼凡め釣

素

竹川

今後

錦繡段

吾妹子神をたのこつ是川の山麓をたそぐ素にけり
父身白ひりみ浦乃りりゆ一守もさく一若もまけけり
やうさく立寄一きくはるを以若をたそかたれまのう勢
網裏無臭無酒錢 酒家門外口流涎
幾回欲解蓑衣當 又恐明朝是雨天

一 家風

私方浦をみり此杜依保産衣橋音次弟竹琴
歌神仕呉弁 糸糸花 柘 葛蒲 白を以人
めれとのら乃ほそく傳りなれと

後於
後於

えう風も思ひうらもをくこくもの家乃めのもん
家の風吹くをに一と笠たのひりさぬより書も付るに

新干

古風の新をみ小松并ぬとをふか家の風とついで

一 塵

床替柘床友 蕨 埋井 硯 中分 跡 子 也 染 紙
雲の流 塵とををふたくと後成のち乃家と定家以

くれちと云云乃深と塵と云

風雅

山家

門

元うらも塵まき一深神をた月の山乃ちも何き若
早もち後の上居ちりと同ふたつて居世と思ひや
あーそく塵乃為を尺打きく風波のちりとぬぬ思ふ

一 東

東山白川乃流

山家
愚弟

夜を尺一ゆら心や山楳むく一よかて居下あう心
細日さく片の青柳打をみ手書居くハ先をちり亦

口 推の 吹風の浪立ちよふまき一乃これ花
 山は草のたをりのあはまたに恨こしよるは多しを鳴る
 かののそくを秋了実ぬ原け山のあしれ小よ冬と正しく
 日影をぬけ枝の雪よとちきりしとく白小窓乃梅くえ
 百歩や大川穴丑寅なとりへのほろりあやきとほつる

一 枕書 春日 仙 卒 於 波 女 花 蓮

三三 三の山はと木紫に書並一花の級とく麻野荒く那
 千歳 づとくまのさるのこは沈月はいつりせやとるまうけ者崎
 新は撰 一乃山は乃をよむ花と書中の語乃あしりまて原

一 千歳 此の為仕 親遊同位時向私仙三 北列 君を新 杖坂 娘山松

水澄 黄河千年ニ沈ト
云コトアリ
 千と始りともまひしとく六字ゆくはや和申の色こやまきし

一 世乱 行む 菱 白虹 守 帝位 あり 之 ぬ 幸 哉

源氏あり乃心

一 合下 歌 繪 白土 神 示 符 齋

山家 横衣 山家
 こゝと神と中へ菱とおもひやえしあはすらん人もまを
 あはせをやゆきとかしきし其言とうたえたけはとく白
 あはせに光やゆき人次女浦 三 ちゆふらりを其言人巴

一鬼

入路 雪山 伴約 安達系 黒塚 君う山 君う息
百歳 大木人 尾屋 権宿 須弥山 歳首 於の内
葦虫

終六 かくれおれうに右をかへくも竹心は鬼とつる
ま木 あつ玉の年とむくよ保年の内は鬼とも
深川 亦あめにうとにま父のつくくく心は鬼も又分り

一終 終の尾乃る林かろこ

終六 龍のほろすの係す神乃音とやぬよまをさ
ま木 然大あはくう代羽渡らる候をすも終のま龍通物
口お やすおかたは行所も思ふ人ふえゆちる物以

三體 大随鶴去遊諸洞 龍作人來向大還
朗詠 逆笋未抽鳴凰管 盤根終點臥龍文
口 歸嵩鶴舞日高見 飲渭龍昇雲不殘

一四下

紀乃友則司たまりくこと後時年にくくそとよま
ぬうとこい侍下まふれと

口 今まよまをくうはるうり一つうとを余り年切は
口 万代のあふもかれぬ白氣吹う一安くもか
口 四十あまらるそととぬきりうら六同一卯花
口 万代とまらふそとぬきりうら六同一卯花
口 龜乃尾の山乃岩根よとめつ流る滝乃く玉千世の
口 葉中乃流ふあはれ知なきう四十八とまぬす
口 於玉の神

終は 詠つ、日づきもぬらぬ山つら、甲子年まの暮をきり、
は於 産つたな引申人のねまわらふとふと君うすよのきり、

一五十一

風雅 又十と迷ひ来よ、縁とくぬさよ、只彼ゆへ、
後於 けし行ふ十の末の山井、水はの水とく、
口 ぎいよ、いた乃じつ、
終六 ぬ下果ふ、
終 洗よ、

一六十一

愚系 じつひ、

終六 九重の、
終五 中ま、
終四 終は、
終三 終は、
終二 終は、
終一 終は、

一七十一

終三 七十、
終二 七十、
終一 七十、

安ん集を号く附合衆多るをてあふ
志めし年之志家之志を教てお山記
これ止まをててふし一而してすし
と憚於國こくかひれともつる多
多しうまをせつることを

寛保元歲
水無月七日 宇佐公箇書

け一帖を重清雅の輯録せ
らりてあに世の抄抄の
をけをてれを補ひ
考説よたよりすらの至寶ま
ゆりてをてるか
里村法眼宇佐公箇の序跋を
さくをてて乃めいけく何
まらあれよ志く會さや今又

そのまゝのまゝに鄙懐を吐付よ
何ふうちにもとけるよを
たうかく中納言のまゝに
云乃葉もいづくその山ゆ
みちねもいづくその山ゆ

寛延二年仲春初二日

長崎
乾正豪



百六十六

寶曆八戊寅天七月

寺町草堂前

中井平次郎

皇都書林

錦小路新町西下

永田調兵衛

江戸京橋南二丁目

林九良兵衛

